

有る証書ヲ提出スルニハ必ス本末ノ管轄裁判所ノ裁判官ニ頼
サルハカラサルハ勿論ナリ(字漏生国裁判通則第一條第十壹條第一條
第七條アルテムニルグ國第五百四十二條然レハ内國人ナリトテ獨
リ此清亦ニ関シ外國人ヨリ不利益ナル待遇ヲ受ケサルハカラサル
ノ理由完全ナルヲ發見シ能ハス然レ而シテ裁判所ノ物件ニ関スル
管轄ヲ規定スルニ付キ其証書提出ノ争訟ヲ本案訴訟ノ管轄裁判所
ニ送ヘシメント為スハ若シ其本案訴訟カ(現)裁判所ニ属シアル場
合ニ於テ混雜煩冗ヲ生シ得ヘキトテ顧慮セサルニ非ラス乃本法ニ
於テハ証書ヲ保有スル第三者ニ向テ証書ヲ提出ヲ求ムルニハ必ス
一般ノ原則ニ準拠シテ(一)本末ノ管轄裁判所ニ訴訟ヲ起シ之ヲ請求
セザル可ラサルトニ定メタルナリ

抑本文ノ行文ニ依レハ此証書提出ノ申立ハ即其証書カ第三者ノ手
中ニ存スル時(一)第三者ニ對スル証書提出請求ノ訴訟ノ完結スルマ
テ本案訴訟ノ中止ヲ申立(二)如何ニ一種ノ意旨ヲ含ムナリ(三)本案第三
者九十三條第三項九十六條第一項是ニ於テ本法ハ之カ為メ一時本
案ノ(一)審ヲ中止シ殊ニ第三者ニ對スル起訴ヲ放テニ遅延セシメ以
テ本案訴訟ノ完結ヲ促シセシムルノ悞ヲ防クカ為メ本文第三項九
十六條第二項ヲ刪却セリ

本文ハ各章條ト其意不ニ於テ同一ナリ又此類ノ修正セントノ動
向アリテ廢止セラレタルノ外異論ナリ採用セラレタリ
第一解証書提出ノ申立第三項九十三條第三項九十九條(一)本文ノ証
書提出申立ニシテ本法第三項八十九條ト異ナル所ハ即管轄証書カ
第三者ノ保有ニ存スルノ理由ヲ述フルノニ止ラス(本法第三項
八十九條第四項)本文第三項九十九條中ニ引用セラレシ(尚)更ニ之

申立相争ナリハ立証者カ本法第三百二十六条第一解ノ取除付手
人ヲ提出ノ為メノ期日ニ呼出ス
トノ要スル
期限ヲ指定シテ言渡ス
本
法第三百九十一条乃至第三百九十三条
未遂而シテ此期限ハ更ニ延長シ
得ハレト
虽モ空リ之ヲ経過シ
レシ
場合ニ於テ立証者カ追補ノ為メ
相争ノ時向ニ証拠ヲ提出セサル
中ニ限リ
自ラ立証方法ヲ失却ス
レ
本法第三百二十一条及ヒ其第一解
未遂又時限ニ後クレタル申立
ヲ却下スルニ付
テハ
本法第三百九十八条ヲ参看ス
様
証ノ
受
領ニ付
テハ
第三百九十九条及ヒ其註解ヲ参看ス
ヘシ

〔第五解期限ノ短縮〕 本文第三百九十六条第二項ノ要件中ニハ即付
手人ハ更ニ早キ期日ニ於テ立証者ヲ呼出サレムル
トヲ得ルノ
事アリ
本法第三百九十一条以下
未遂而シテ
付手人ハ如日ニ於テ彼ノ
要件ノ存在スル
トヲ明示セサル
ヘカ
ラス
裁判所之ヲ
信
認スル
中ニ本
法第三百二十九条ハ本法第三百二十一条ヲ適用スル
トナリ
上ノ
第四
解
未
遂

〔第三百九十七条〕 官廳又ハ官吏ニ付スル手紙ノ送
証書カ立証者ノ主張ニ依レハ官廳又ハ官吏ノ手中ニ存スル時
証
執
ノ
申出ハ官廳又ハ官吏ニ証書ノ交付ヲ依頼スル
コトノ申立ヲ以テ之ヲ
為ス
此規則ハ原被告法律上ノ規定ヲ從ヒ裁判所ノ力ニ頼ラス
シテ
取寄ス
ル
ユ
ト
シ
得
ヘ
キ
証
書
ニ
ハ
之
ヲ
適
用
セ
ス
官廳又ハ官吏第三百八十七条ニ依リ提出ノ事移アル
場
合
ニ
於
テ
証
書
ノ
交
付
ヲ
拒
ム
時
ハ
第
三
百
九
十
三
条
乃
至
第
三
百
九
十
六
条
ノ
規
則
ヲ
適
用

スルモノトス

〔第一解理由ノ説明〕 本法第百九十四條ノ標準ニ照シ提出事務其理由アルハ裁判所ハ官廳又ハ官吏カ其清^{依頼}ヲ聽許セサルニ因リ清^{提出}者立人ノ更ニ訴訟ノ起シ提出ヲ強制セント欲スル^意任スルナリ此場合ニ於ケル手續ハ本法第百九十五條第百九十六條ノ規定ニ從フ之ニ反シ本法第百九十四條ノ理由ニ^{依リ}証言ノ提出ヲ望モ能ハサルハ官廳又ハ官吏ハ受訴裁判所ヨリ求ムル其証言ノ^{交付}拒絶スルノ職權アリ而シテ官廳又ハ官吏カ理由ナキ異論ヲ主張スル場合ニ方リ果シテ^{交付}拒絶ヲ為ケレバ得ル事又如何ニ方法ヲ以テ之ヲ為シ得ヘキ事ノ問題ハ官廳及ヒ官吏ノ為メ設ケアル法律ニ依テ判定スヘキ而已

〔第二解制定ノ沿革〕 各章條皆同レ特リ此部獨ニ聯邦章程第百九十四條ニ於テハ証言提出ノ事務ハ帝國法及ヒ各聯邦法ニ依ルヘシトノ明文アリ又國務院委員會ニ於テ本文ニ第百三項ヲ追加レ以テ第一解ニ添フル意ヤツ法律上ノ^{規定}規則ト為シタリ

〔第三解説明〕 官廳及ヒ官吏ノ字ニ付リハ本法第百八十五條乃至第百八十三條ノ第百四解及ヒ第百四十一條並ニ其註解ヲ参照スヘシ而シテ本文ハ官廳~~及ヒ官吏~~カ立証者ノ訴訟相手人トシ場合ニ付テハ規定スル所ニ非ラズ此場合ニハ即本法第百九十一條第百四項ニ依テ明カナル如ク且ツ本法第百八十六條ヨリ第百九十二條ノ規則ニ^{依リ}檢スヘキヤリ然レモ官廳又ハ官吏例ハ公証人ノ如キ尚且刑法第百三十九條第百三十三條ノ場合ニ於テ証言ノ提出ヲ拒絶スルハ立証者ハ私法上ノ請求ヲ起訴シ其職務上保存スル証言ノ提出ヲ求ムルヲ得ヘシ此場合ニハ即本文追加ノ第百

項ニ從ヒ本條第三百九十三條乃至第三百九十六條ノ手續ニ依ル一
キナリ

本條第三項ハ概シテ本法第三百九十三條乃至第三百九十六條ニ依
ル

スル規定モ自ラ準用ス一キモノナル

第三百八十七條ニ依リテノ之アル限ニ趣キニシテ而シテ本
法第三百八十八條ニハ更ニ牽連セサルモノ、如シトハ當ニ然カモ

既ニ第三百九十四條ヲ引用シアルヲ見レハ則チ第三百八十八條ニモ
拠ル一キハ言フ俟テサルノミナラス亦實際ニ於テモ其價直ナキニ

非ラサル一レ本法第三百九十三條乃至第三百九十六條第三條各
必克本條第三項ノ行文不備ナルカ為メ今特ニ其事實を記録スル此

第三百八十八條ヲモ適用ス一キナリ述一サル一カラサナリ

又本條第二項ヲ指シハ即此場合ニ本法第三百八十五條ニ依拠ス

一レトノ趣キナリ本法第三百八十五條及ヒ第三百八十六條ノ解釋

各條例ハ立証者ハ自己ニ屬スル証言ヲ公証人ニ就テ自ラ取出シ

得一キナリ然ルニ立証者ハ其立証人ノ手申ニ在ルコトヲ申立テ以

テ裁判所ニ申出テ為ルモノトハ為シ難キナリ

又本條第一項ノ場合ニ於テハ即裁判所ハ立証決定ニ於テ其
其取寄セ得一レトト看做ス

一ト本條第三百九十四條第一項各條而シテ若シ其提出ヲ拒マレタル
ハ裁判所ハ其旨ヲ立証者ニ通知シ其後ノ処分如何ハ之ヲ立証者

ニ放任ス然リ而シテ本條第三項ノ要件ニ備ルル立証者ハ本法第三

百九十三條ノ意ニ依リテ申立テ為ス一キナリ然レトモ又本法第

三百九十八條ノ制裁ヲ準用シ之ヲ却下レ得ルナリ

又捺印ノ性質ヲ付テハ本法第百九十九条並ニ其註解ヲ参照シテ
可ト)

第百九十八条 (遅延) 書証ニ関スルノ全

立証決裁ノ言渡後是ニ掲載シタル事証ニ係ル事實ニ付テ第百九十
三条第百九十七条ニ依リ証拠ヲ申出ル場合ニ於テ証信ヲ取寄スル
為メ要スル手續ニ因リ訴訟ノ完結ヲ遅延シ又裁判所ハ原告ノ一方
訴訟ヲ遅延スルノ故意ニ出テ若クハ大ナル怠慢ニ因リ以前ニ証拠ヲ
申出サリシコトノ心証ヲ得タル時ハ申立ニ依リ証拠申出ヲ却下ス可
キモノトス

(理由説明、制定沿革及解釋) 本条ノ理由ヲ説クニハ本法第百三

十九条ノ説明ニ載スルモノヲ援用シテ可ナリ抑世遅延シタル層而

証拠ヲ付テハ即進テ申出タル証信カ第三者又ハ官廳公吏ノ官吏ノ

手中ニ存在スルモノナリトシテ限リ進テ申出ル証人証拠ト同一ノ

処分ヲ受クルナリ又^{相手人}第^{相手人}手中ニ存スル証信ノ提出ヲ進申スル

場合ニハ本条ノ制裁ハ各者ヲ得ス何ントシテハ即相手人ニ係ル提

出申渡手續ハ敢テ訴訟完結ヲ遅延ナラレタルト大ナル一カラザル

ヲ以テナリ云々

本条ノ制定沿革ニ付テハ本法第百三十九条第一解ヲ参照スル

又此解款ニ付テハ同条第二解ニ在アル所ニ從テ同条及ニ本条ノ場

合共ニ訴訟相手人ハ申立ヲ要スル趣キナリ

第百九十九条 (侵命又ハ侵汚ノ裁判官ニ関スル全)

口頭審理ニ於テスル証信ノ提出ヲ著シキ^{支障}支障アルカ為メスコトヲ

得サル時又ハ証言重要ニシテ紛失シ若クハ損傷スルノ恐アルカ为メ
其提出ヲ懸念スル時受訴裁判所ハ証言ヲ其裁判官ノ一名又ハ他ノ裁
判所ニ提出スルキコトヲ命スルヲ得

〔理由説明制定沿革及ヒ解釈〕

理由説明ハ本法第三十及ニ

〔命令ノ趣意アルヲ为メ本法実施法第三十三条第二ノ以テ廢シタル〕高

法第三十九条ヲ援用シタル〇抑私法ノ意旨ニ於ケル証言提出ノ必

務アル者ハ本条ノ裁判所ノ裁判ヲ要スルキ規定ヲ准用セラレシ

ヲ求ムルノ権利アルトナシ〔本法第三十及二十条第二項末句〕然レ本法

第三十及九十七條第一項ノ場合ニ於テ証言提出ニ付テノ規定〔本法第

三十九及九十七條第一項末句〕ハ他ノ亦ハ場所トシテ其証言ヲ提出スル

キモノヤ不ノ問題アルハ之ヲ准用スルキナリ若シ提出ヲ許ルキヤ

ル場合ニ在リハ受訴裁判所ハ即本条ノ意旨ニ於テ更ニ命令ヲ为サ

ル可ラサルトナリ

本条ハ国法院委員会ニ於テ異議ナク採用セラレ且各章條ニ因リ独

リ北部獨乙聯邦章程第五十九及九十五條ニハ裁判所ハ口頭審理ノ時証

言ノ趣旨ニ付テ確タルヲ知リ得ルヲメ受訴裁判官又ハ受訴裁判官

ニ其示教ヲ为ス可シトノ明文アリ太ク便法ト云フヘシ〇本法第三十

及三十三條第一項及三十四條第一項ノ各條ノ各照スルハ則特ニ〔証言〕

取ルル場合ニ限り裁判所ハ提出シタル証言ヲ裁判所書記局ニ保

管セシムルノ權アリト断言スヘシ但既ニ調査制ヲ採用シタル以上

ハ本法第七十六條第一項及第二項末句提出ノ命令ヲ以テ之ヲ調査

〔注〕
更ニ
妨
アルトナリ

若シ之ヲ为シ得サルハ受訴裁判所ハ本法第二十八及三十四條第一項

及三十五條第一項及三十九條第一項並ニ其註解末句上級

裁判所ノ審理ノ為メ〔本法第百四十七條〕本條又受命裁判官受任裁判官ハ受任裁判所ノ會得ノ為メ完全ナル解釋又ハ原本ヲ作ルヲ要ス〔本法第百二十二條〕本條第百五十二條及ヒ第百五十八條第百五十九條第百六十條並ニ其註解^ハ第百五十八條^ハ規定スル口頭上ノ原告ノ申立ハ到底裁判所カ為ス一ハ証信^ハ觀驗^ハ代用^ハ能ハサルトノ〔北部獨ニ聯邦中〕第百五十九條第百九十八條^ハ本條^ハ也

受命裁判官及ヒ受任裁判官ニ関シテハ本法第百二十六條第百三十三條第百三十四條及ヒ第百三十五條第百三十六條第百三十七條第百三十八條第百三十九條第百四十條第百四十一條ノ規則ニ付キ注意ス一キヲアリ即本節ニ於テハ本法第百三十六條第百三十九條ノ如キ^ハ又^ハ揭ケアラサルヲ以テ証信提出ノ義務及ヒ立証ノ^ハ拒^レ場^ニ付^テハ受任裁判所^ニカ^テ裁判^ヲ為^ス一^ハキ^トナ^ル

第四百條 原本ニ関スルノ事

公正証信ハ原本ヲ以テ之ヲ提出シ又ハ公正証信上自ラ公正証信タルノ要件ヲ具備シタル公正証信タル原本ヲ以テ之ヲ提出シ得裁判所ハ立証者原本ヲ提出シ又ハ原本ヲ提出スルノ支障トナル事實ヲ^ハ明^示ス可キコトヲ命スルヲ得^ル命令^ハ其^ハ効果^ハナキ^ト時^ニ裁判所^ハ任意^ニ見込^ヲ以テ公正証信^ヲ經^テタル原本^ニ何^レナル^ハ証^信力^ヲ付^ス共^ニ一^キキ^キ裁判ス

第一解釋理由説明及ヒ制定沿革 法部西國法制ニ於テハ凡ソ立証者ハ對千人ノ求アル中ハ必ス証信^ヲ其^ハ原本^ニ提出ス一^ハキ^キ義務アリト定ムルヲ〔法部西國法第百三十三條第百三十四條〕本條然レ^ハ其^ハ如^ク一概ニ制定シタル所ニ從^ハハ^ハ其^ハ許^シ滯^ニ隔^ラレ^メ得^ル立^証者^カ實際^ニ其^ハ原本^ヲ提出スルニ^ハ差^支アル^ハ其^ハ更^ニ一^層ノ^ハ危^害アリ^易カ^ルハ^ハ是^ニ於^テキ^キ即^果シ^テ原本^ヲ必要^トナス^ハ不^ニ付^キ裁判官^ノ心^証

ニ依リ之ヲ裁判セシムルノ便利ニ如カサルナリ然レ下ノ第二解卷
卷而シテ裁判所ノ命令及効果ナキ場合ニ付キハシノフル国章程第
三百九十四条ニ於テ一、豫審トシテ其裁判所ニ於テ立証方法ヲ失
フタルモノト認めルノ規定アリ此レ不適者ニ過疎ノ規定ト云フハ
レ蓋此場合ニ方テハ其証言ノ法律上ノ証拠力ハ之ヲ失ヒ且其公証
ヲ經アル原本ハ如何シノ証拠力ヲ有レテ可ナルヤニ付キ裁判所ノ
心証ニ依リ裁判スルモノト為セリ即充分ナルヘシ
又提出シタル証言カ外国語ヲ以テ綴リアリタルハ其裁判所ハ本法第
百三十三条第三項ノ通則ニ依リ其互譯文ヲ添付スヘキトシ命令ニ得
ルナリ(北部独乙縣印章條第五百九十七條參看)
証言ノ趣旨中僅ニ其二三分ヲ要スルノ場合ニ方テ証言ヲ分別シテ
提出シ得ヘキ規定ノ特キスルナリ(例ハ、字漏生國裁判通則第一節

第十條第九十九條第百三條ハンノフル国第三百九十五條ウルク
ベルグ国第五百四十九條第五百五十一條ノ如キ是ナリ)本法ニ於テハ
詳細ニ失マシ規定ヲ避ケンカ為メ之ヲ採用セズ然レ下ノ第四解卷
參看

各章條皆相同シ又本条ハ異ナリノ採用セラレシ
第三解公正ノ証言(第三百八十条參看)抑本法律ニテハ偏ニ公正証
言ト明示ス故ニ理由説明ハ私証言ノモ包括レノ法ト爲シ本条
ハ私証言ニ及ボスヘカラズ而シテ本法ニ於テハ別ニ私証言ニ付キ
更ニ規定スル所ナレ是故ニ私証言ノ原本ノ証拠力ニ付テハ一ニ裁
判官ノ心証ニ任カセサルヘカラザルナリ(本法第二百五十九條及ヒ
第三百八十条乃至第三百八十三條ノ第一解參看)
(第三解原本及ヒ原本)公正証言カ原本ナリニ因テ其証拠力ニ差異アリ

ル各邦ノ規則例ハ法朗西民法第千三百三十四至千三百三十六
十六至千如キハ本条ノ為メ廢止セラレシト本法実施法第百四
百九十九條ニ依リ本邦ト隣邦トノ關係ニ付テハ別ニ關係ヲ社
而シテ二三邦國ノ証規則ニ依リハ即チ凡ソ証信ニ付テハ公証人
其原本ノ本人ニ交付シ唯其記録ノ自己ノ簿冊ニ留メ置キ其他ノ証
信ニ付テハ備ニ隣邦ノミテ付共スルナリ又判決會其他公出ノ命令
ノ原本ハ之ヲ原本ト做ス之ニ反シ記録ニ添テ一々証明信ハ然ラサ
ルナリ(本法第百八十六至百八十八條及ヒ第百八十二條
又本条ハ敢テ本法第百九十九條ニ關係シ及ホスナリ)本法第百
八十三至百八十五條ニハ十八百七十九年二月六日ノ帝國法第百九
十二條ニ於テ民事上ノ身分証明ノ授付ノ如キ是ナリ)

程式ニ關シテハ民法ノ規定ニ從テ可ヤナリ(本法第百四十三條第二項
朱色)

第四條 證明信ノ一部分ノ提出 上ノ第一條ニ述フル所ニ從テハ即
チ之裏ニ証明信ノ一部分ノ提出ノ許不ハ之ヲ裁判官ノ判斷ニ任
テスルナリ(特ニ本法第百二十二條第三項ニ明記スル所ノ訴訟
行スル關係ニ付テハ定メタルノミ之ニ反シテ商法第百三十八條ノ
規則ハ本法實施法第百四十一條ノ為メ廢止ニ屬セラレサルヲ以テ
商法第百四十一條ニ於テハ取除ニ係ラサル限リハ仍ホ存在スル
ト知ル)

第四條 一條 (証明信ノ提出ニ關スルノ條)
立証者ハ証明信ヲ提出シタル後ハ對テ人ノ承諾ヲ得タリト
限リ其立

証方法ノ抛棄スルコトヲ得

〔理由說明制定沿革及ニ解然〕 本条ニ付、ノ特別ノ說明ハ本法第三
百六十四條ノ說明中ニ含まスル一般ノ說明ハ亦同条ノ注解ヲ参照
シテ知ルヘシ

各中梅本条ニ因レ特リ北郊独ニ聯邦中室第五百九十九條ハ異ナリ
ノ即訴訟對手人ノ証言提出ノ手續ヲ抛棄スルニ過キスレバ且
口頭審理中ノ提出ノミヲ定ム又對手人ノ承諾ノ下ハ之ヲ明記シテ
ラケルナリ

如何ナル提出ノ場合タルヤハ本条ニ之ヲ明記スルコトナシ然レモ偏
ニ抹消ノ為メノ提出ヲ指シタルハ本法第三百八十九條第三
百九十七條第三項及ヒ第三百九十九條ニ意此ノ如ク為スルカニス
タイニ氏ノ主張ニシテ本条第三百八十八條ト相背馳スルコトハ之

アラズ蓋此第三百八十八條ハ訴訟人ノ主張ノ中ニ相手人ノ主張
証言提出ノ為メノ権利ヲ相手人ニ與ヘタルノ規定ニ過キス
之ニ及レ本条ハ相手人承諾セケル限りハ既ニ提出シタル証言ヲ抛
棄スルヲ許サレル所ナリ

又若シ原告被告両造共ニ其証言ヲ抛棄シタルハ裁判官ハ為レ得ハ
キ限リ其證據ノ証言ノ判断ノ中ニ措クコトヲ為シ得ルナリ本法第三
百六十四條第二項ニ解然

第四百二条 (証言ナルコトノ証拠第一公正ノ証言)
其程式及ヒ趣旨ニ依レハ官廳又ハ公然ノ信用ヲ得ル人ノ作りタル
コトノ判断ニシテ証言ハ自ら其正ナリト推測セラルヘシ

裁判所ハ其真正ナルコトニ付テ疑アル時職權ヲ以テモ其証言ヲ作

タル官廳又ハ人ニ其真正ナルコトニ付テ陳述ヲ為サレリトシテ

第四百三条 (全上)

外国官廳又ハ公然ノ信用ヲ被ケル一キ外国人ノ作りタルコトノ判然
スル証告ヲ詳細ナル証明ナクシテ其正ナルモノト爲做ス一キヤ否ハ
裁判所其場合ノ状況ニ從テ之ヲ定ム可シ

其証告ノ真正ナルコトヲ証明スルニハ^帝獨逸國ノ領事又ハ公使ノ公認
証ノ以テ是レトス

〔第一解理由說明及ニ制定沿革〕 本文第四百二条乃至第四百七条ニ
於テハ証告ノ真正ナルコトノ証拠ニ付テ規定スル所ナリ

内國ノ公正証告ニシテ其体裁及ニ趣旨ニ於テ其真正ナルコトノ明瞭
ナルモノハ其証告カ白ク其真正ナルコトノ目標ヲ包有スルヲ以テ敢テ

對千人ノ認後ヲ要トセス乃其証告カ其真正ナルコトノ推測ヲ因有ス

レハナリ又本文第四百二条第二項ハ元ト北邦獨乙聯邦章程第六百
一条第二項ニ模倣シタルモノニシテ其真正ニ付疑アル中其疑ヲ以

テモ亦之ヲ作りタル官廳者タル人ヲシテ其真正ナルコトニ付陳述セ
レメ得ルニ定メラルハ公正証告ノ真正ナルコトニ對テシ疑ヲ解

ス太ク簡便ニ且尤モ適者ノ方法ト云フハキナリ

外國ノ公正証告ニ付テハ其真正ナルコトニ對テシ疑ヲ猶モ内國ノ公
正証告ニ於ケルカ如ク解キ得ヘカラス何レトナシモ即其真正ヲ表

ス一キ外邦ノ目標及ニ外國ニ於ケル其真正^{ノ表}ニ據ル^ル方法ハ内國裁判官
ニ於テ之ヲ了知セケル場合^カハ一キヲ以テナリ是ニ於テ即裁

判官特別ノ証拠ヲ必要ト爲認ケル片帝國ノ領事又ハ公使ノ爲レハ
ル外交官ノ証明ハ其真正ヲ証スルニ最モ確實ナル方法ト云フハ

レ加之是カ为メ使外国官廳又ハ公唇人ノ果シテ其管轄権ヲ有ルル
トシ共ニ確實ナラシメ得ルヤト云々千八百六十七年十一月八日ノ帝
国法第十四条参看

本文ハ各中務皆同シ又国務院ニ於テ異議アリ採用セラレタリ
第二解内国ノ及ヒ外国ノ証人 本邦ノ例文本法第十三条并七解参
看ニ從ハハ終ヘテ獨ニ帝国内ニ於テ作りタリ公証人ハ即内国ノ
公証人ト云フヘキナリ

本文第四百二条乃至第四百七条ニ定クル所ノ真正ナルトシテ公証ト
本法第二百三十一条ニ於ケル証人ノ真正ナルト又ハ真正ナラサル
トニ付テハ豫審訴訟トハ全ク其差別アルナリ

公証ノ官廳及ヒ公唇人ニ関シ並ニ公証人ノ程式及ヒ趣旨ニ関シ
テハ本法第二百八十条乃至第二百八十三条ノ第四解ヲ参看スヘシ
又事件ハ地方ニ支配セラレトシ格言ハ其場合ニ在リテ左用セラル
ヘキナリ(本法第二百三十四条並ニ其註解参看)

又公日記ノ証人ハ必竟公証人ノ官廳ノ日記ニ登載シアルト云フノ
理由ヲ以テ真正ナル公証人ト為スヲ得サルナリ蓋其趣旨如何ニ
ニ關係アルヘシ

本文第四百三条并二項ニ依リ公証ヲ受クヘキハ立証者ノ左ニ為ル
一ヤ所為ナリ若シ此公証ナリ場合ニ即本文第四百二条并二項ニ
從ヒ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ為スノ規定アリ

(第三解不服ノ申立) 公証人ノ真正ナルトシテ陳述ニ付リテ本法第
四百四条ニ於ケル私証人ノ如ク規定ヲ定メス何レトナレハ
即本文第四百二条并第四百三条ハ真正ナルトシテ推測ヲ付定メシ
ハテハ蓋其推測ニ付テテ敢テ抗弁スヘカラザルナリハ猶亦既に本文

第四百二条第二項ニ於テ示スカ如クナリ而シテ此事ハ本法第五
四十三條第四十四條ニ貫連セシメテ法文上註明スルヲ可トス
ハレ〇対手人ハ即公正証書ノ真偽ナルヲ付テ争フヲ得而シテ其
不真ニ付テハ之ヲ証明セサルハ一カラス持テ外國ノ公正証書ニ付
テ裁判官ノ判断ニ任カスカ第四百二條第二項乃至又ハ立証者其
真ニ付テ証明セサルハ一カラスナリ
公正証書ノ真偽又ハ不真ニ付テハ依
テ証明スルヲ得んテハ本法第四十六條乃至第四十八條第一解第三
解朱也

第四百四條 (真ニナルトシテ証明第三私証書)

私証書ノ真ニナルコトニ付テハ立証者ノ対手人ハ第四百二十九條ノ規
則ニ從ヒ陳述ヲ為ス可キモノトス

証書中ニ署名アル時ハ其署名ノ真ニナルコトニ付テ陳述ヲ為ス可キ
モノトス

其陳述ヲ為ケル時合ニ於テ真ニナルコトヲ争ハレト欲らん趣意原
被告ノ別ノ陳述ニ因リ明カナル時ト爲セ其証書ハ之ヲ認諾シラントモ
ノト者做ス可シ

第四百五條 (全上)

認諾セラレサル私証書ノ真ニナルコトニ付テハ之ヲ証明ス可キモノ
トス
署名ノ真ニナルコト確定シ又ハ証書中ニ在リ記號ヲ裁判所若クハ公
証人カ公証シタシ時其署名又ハ記號ノ上ニ在リ証文章ハ自ら真ニナル

リト推測セラル可シ

第一條理由ノ註明 提出シタル私証書中ニ署名ノ之アルハ則本
 文第四百四條第一項ニ從ヒ其第一項ニ掲リシ陳述ヲ唯署名ニ付テ
 ノシカセシムルニキナリ而シテ其証書交付人カ署名ヲ真正ナリト自
 認シテ確定シタル中ハ亦本文第四百五條第一項ニ從ヒ其署名ノ上ニ
 在リテ文章ニ真正ナリト推測セラルルニ蓋此規定ハ手續上尙便ニシ
 且社會交際ヲ確保スルニ必要ナシトシテ亦本法ハシノフル
 國章條第四百一十條第四百二條第九ノ四ノハ國籍法第五百五十
 八條第五百六十條ニ依ヒ証書中ニ在リテ記号ニ付テモ亦之ヲ採用セ
 本條本文ノ注釋ニ付テ定メサルハ何レトナラハ即記号ナシノハ
 通例各私人ノ認法ヲ得易カラシムル以テ之ヲ乃亦本文第四百五條第
 二項ノ推測ハ公証人又ハ裁判所ノ公証ヲ經テハ記号ノ存スル私証
 書ニ止メタリ是レハ亦本法第三百八十一條ニ於テ此ノ如キ記号ヲ
 署名ト同一ノモノト定メアムルニ因ル

署名濫用ノ証明ヲ許ルスハ否ニ付テハ民法上ノ規則例ハ白紙ニ
 署名ノミナリカセリタルモノニ字漏生内國通法第一條第十三條第四
 十二條第四十三條ニ付テ更ニ註明スル所ナシハ蓋モ是ハ勿論
 ノトトシテ敢テ言ハサルノミ

私証書ノ真正ニ付テ争ハルハ其ハ証明ヲ为ケルル一カラス此証明
 ニ依リテハ一般ノ規則ヲ適用スルニキナリ

獨ニ普通法及ビ字漏生法制ハレノフル國第三百三十七條以下ニ定
 ムルニツイテコレニスアトシテ(註)各ノ真正ニ付テ(註)ハ亦法ノ立証制ニ適
 當セザルヲ以テ法例西法制(註)國民法條第四十三條二十三條五ニ澳州太
 利法制(註)其地ノ新定法制ニ依ヒ之ヲ若除シテ

「第一解制定ノ沿革」字源生國章條第三百七十五條第三項ニハ本文
第四百四條第一項アリ又北野獨乙聯邦中條第六百六條ニハ
上ノ第一解ノ第四項ニ奉ルル下リ法文ニ明掲ス此他意ヲ於テ各
中條皆相同シ

又国務院委員会於テハ本法第三百八十四條 下ニ指ス 述ハクハ勅語
ノ外別ニ異論ヲカリス

「第三解陳述ノ義務」抑本文第四百四條第一項ノ趣旨ハ概シテ一般
ニ直リテ之ヲ所シテ則單ニ本法第三百八十一條ニ於テ証拠力ア
ルモノト陳述シタル私証者ノミヲ指スル川ヲス反テ全ク程式ナキ
証者ヲモ概言スルナリ「本文第四百四條第二項ノ署名アル時トハ之
アルトシ必竟程式ヲ欠ク証者トシ場合、依リテハ証拠ヲ成シ得ル
ナリ」本法第三百八十一條乃至第三百八十三條第五解各條此署名ハ付

テハ右ノ孤立ニ採用シタル注解中ニモ亦述フ所アリ

記号ノ真正ナルヲ付テハ「其理由」付テハ前項ヲ接シ第五解各條
訂正人ハ之ヲ陳述スルヲ要セス唯其公証アル場合ニ限り有推詰ノ
モノナリナリ然レ以上ハ又本法第四百二條第四百三條ニ依リ認議
ヲ得ルヲ要セス上ノ第一解各條然レ是カ為メ單ニ記号アル証
者ハ全ク証拠力ヲ失フニ非ラス「本法第三百八十一條乃至第三百八十
三條第五解各條而レハ其本文記号ヲ除キ」ニ付テハ訂正人亦陳述ス
ルキヲ務メ免カレヌ

本文第四百四條第三項ノ理由ニ付テハ本法第四百二十九條第二項並
ニ其註解ヲ参照ス

「第四解真正ナルヲ」証拠第四百二條乃至第四百三條ノ第一解并ニ
項各條上ノ理由説明ニ依リ且本法第四百六條ニ於テ掲グルル如ク

此立証ノ通例ノ方法 ニ指 為シ得ルナリ唯本文第四五條第一項
ニテハ立証者ノ立証義務ヲ**明確**シ而シテ其立証方法ハ之ヲ制限セ
ス是故ニ本法第四五條第一項ニ云々ヲ以テモ亦ト明記シテ本
法第四五條及第六條第七條ノ第一解ニ核尋らん北郡獨乙縣印中
梅第六五條ヲ参照スヘシ

上ノ第一解ニ就ク一種特体ナシ獨乙普通法ノ印中ニコレモアイハ
ハ全ク之ヲ採用セサシ意ハ即本法ノ行文ニ於テ判然ナリ然レ氏適
當ノ場合ハ方テ本法第四五條以下ニ依リ宣誓要示ヲカレ又ハ裁
判官ノ命楚^ニ本法第四五條三十七條ヲ為ス^トモ許サレハ非ラズ又
本法第四五條第六條第七條ニ於テハ一種ノ立証方法ヲ示シアリ
第五條其趣旨ハ真正ナリトノ推測 抑真正ナル^トノ推測ヲ固有ス
一キハ即認後セラレ果シハ真正ナル^トノ証明セラレ^ルハ署名ノ上ニ

在^ル上ノ第一解兼^テ又ハ公証セラレ^ルハ記号ノ上ニ在^ル本法第三
百八十五條乃至第三百八十三條第五條兼^テ文章ノ上ニ是故ニ其後
尾ニ在^ル文章ニ付^テハ又裁判官ノ判断ニ從^テナ^リ本法第二五
九條^ハ本法第三百八十五條乃至第三百八十三條第五條兼^テ

本文ニ於^テ文章トハ敢^テ其字樣ニ拘泥ス一キハ非ラズ必スヤ石版
石版ニシテ印刷セラレ^ルハハ^ハ為^ル務券^ノ隱^伏状^ノ受^取証
号ノ如キ明^亮ナシモ^ノヲ包^含スル^ノ事^トシテ^ハ蓋^シ本法トノ一般ノ慣
行ニ背^クリ^テ甚^シ妙^必ス^ル事^ヲシ^ル文章ニ限^ルモ^トハ定^ム能^ハサ
ル^ハレ^而シ^テ署名^ニ至^ラハ^ハ本法第三百八十一條第四五條第四
五條ノ意^ヲ於^テハ^ハ即^チ世^ノ要^ヲシ^ル部^分ハ^ハ必^ス層^層セ^ラレ^ルモ^ノ
ナラサ^レ可^クス^ル然^レハ^ハ殊^ニ商^舖ノ家^々ハ^ハ印刷^セラ^レアリ^テ支
那人^又ハ^ハ社^員カ^ハ印^トハ^ハ氏^名ヲ^ハ白^記シ^ルハ^ハ如^キハ^ハ充^分

タルナリ「帝國高等商事裁判院判例第十四卷」

既ニ本法第百八十条乃至第百八十三条第百五解ニ掲ケルカ如ク
本法第百八十一条ノ趣意ハ証書交付自身ノ署名ヲ必要トスルナ
リ本文第百五解ニ於テモ同一トス若シ交付本人ノ署名ニ依リ他人
ノ代書シタル署名ハ即此第百五解第百二項ニ明示スル効力ヲ有レサ
ルナリ然レ氏他人署名ノ証書ト爲セ其証書力ナキニハ非ラズ本法
第百八十条乃至第百八十三条第百五解ニ掲ケル

又公証セラレタル記号ハ本文第百五解第百二項ノ規定ニ依リ自記
氏名ト同一ノ効力ヲ有ス取テ認諾ヲ受クルヲ要セム上ノ第百三解第
百四解第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解
第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解第百三解
ルニ因リテノニ傳カ、公正証書ノ性價ヲ得ルナリ

又公証ナキ記号ハ認諾力アラズ上ノ第百三解第百三解第百三解第百三解
其真正ナルニ加承認セラレ又ハ其外ニ付テ証明セラルトモ尚
ホ本文第百五解第百二項ニ規定スル結果ヲ生セサルナリ○シテハ
イ氏カ曾^取論^取ルル所ハ署名ヲラサルハ同一氏四年洋論雜誌何レト
ナレハ一ハ此記号ナルモノハ頗ル濫用シ易キナルカ为メ法律
以テ之ヲ豫防シ一ニハ真正ニシテ公証セラレサル記号ニ付テハ此
訴訟法ニ於テ全ク無効力ノモノト爲サレハナリ

本文第百五解第百二項ノ推測ニ對シ反對証ヲ呈クルトハ對千人ノ
隨意トス本法第百八十条乃至第百八十三条第百三解第百三解第百三解
其証書ハ本法第百八十四条ニ照シ完全ナラザルハ則^正証書中ニ
自^向テ反對証ヲ有スルモノナリ○若シ証書面(文行)ノ断絶ハ其署名ト
相^相連^連續^續セサルモノト認メ得ルヤ如何ニ付テ各場合ニ方テ裁判官

一、判断ヲ为サ、ル一カラストノ非雅ニ付シ内閣代理員ハ説明シ
テ是等ハ純然タル事實ノ性質ニ因リテ向テナリト云解シ
真正ナル署名ノ濫用ニ付リハ上ノ第一解ヲ先着ス、一レ〇世署名ハ
真正ナリト認タルハ相手人ハ署名ノ白紙ヲ濫用シタルモノナリ
トノ主張ニ付キ証明ヲ为サ、ル一カラスト蓋シ其証各ノ趣旨トモ
~~其論~~ 真正ナリトノ推測ハ單ニ右ノ異論ノ为メ喊失セ
ラルト之アラサルナリ

第四百六条 一面ノ照合ニ關スル条

証各ノ真正ナルコト又ハ真正ナラザルコトノ証拠ハ表面上ノ照合ヲ
以テモ亦之ヲ得クルコトヲ得

此場合ニ於テハ立証者ハ比照ヲ为スニ適
当ナル一面ヲ提出シ又ハ第

三百九十七条ノ規則ニ従ヒ其交付ク申立テ又ハ必要ナル場合ニ於テ
其書面ノ真正ナルコトノ証拠ヲ申出ツ可シ

比照ヲ为スニ適當スル一面相手人ノ手中ニ存スル時相手人ハ立証者
ノ申立ニ依リ之ヲ提出スルノ義務アリ、第三百八十六条乃至第三百九
十一条ノ規則ハ亦之ヲ適用ス相手人比照ヲ为スニ適當スル一面ヲ提
出ス可キコト又ハ第三百九十一条ニ定メタル宣誓ヲ为ス可キコトノ
命令ニ従ハサル時ハ其真正ナルコトノ証拠ハ之ヲ得ケタルモノト看
做ス

立証者カ比照ヲ为スニ適當スル一面第三者ノ手中ニ存在シ訴訟ヲ以
テ其提出ヲ为サレタルコトヲ明示スル時ハ第三百九十六条ノ規則ヲ
適用ス

第四百七条 (全上)

吾面比照ノ結果ニ付テハ裁判所任意ノ見込ヲ以テ之ヲ裁判シ適當ナ
ル場合、於テハ鑑定人ノ意見ヲ聽キテハ後裁判ヲ為ス可シ

第一解理由ノ説明 公正証言及ヒ私証言ノ真否ニ付テハ凡ステノ
許ス一々立証方法ニ依テ之ヲ証明シ得ルナリト下ノ第二條及ヒ第四
百四十五條第四百五十五條ノ第四條解意殊ニハ其真否ノ証拠ハ本文第四
百六十五條一項ニ從ヒ吾面対照ヲ以テモ亦得ルナリ

必竟此手續ニ付テハ別ニ詳細ナル規則ヲ定ムルヲ要セス今本條ニ
於テハ本文第四百六十五條第四百七十五條ヲ以テ唯対照ス一々吾面ノ性質
及ヒ其証拠ノ結果ニ付テ規定シタル而已

立証者ハ其比照ス一々吾面ヲ提出シ又ハ本法第三百九十七條ノ方
法ニ依テ之ヲ取出シ得ヘシ又訴訟相手人又ハ其三者ニ向テ其吾面

提出ノ申立ヲ為スルヲ得ルナリ而シテ其相手人ニ対スル吾面提出
ノ申立ニ付テハ其手續ハ其為メニ妨グルルヲ大ナラズ乃テ相手人カ比照
ノ為メ亦メラレシムル吾面ヲ提出スルカ又ハ本法第三百九十一條ノ

宣誓ノ為メカ^ニナ^ルヤ^キナルヤ若シ其吾面ノ提出モ又ハ宣誓ヲセ拒
ム^ルハ其証言ノ真否ヲルコトノ証拠ニ等ケラレシムルモノト爲ル

トテ豫審ニテ確定セラルルナリ之ニ反シ第三者ニ対スル^比照吾面
ノ提出ノ要求スルル^ルハ其^ハ訴訟ヲ^ハ避^ルル^ルハ^ハ其^ハ誤^ルナ^リキ^ニハ^ハ之^ハア
ラス也^レ凡^レ其^ハ規定ヲ^ハ全^ク採^用セ^ルル^ハ又^ハ正^當ニ^ハ非^ラザ^ルハ^ハレ

抑本條ニ於テハ其吾面比照ク或ル種^類ノ比照吾面ニ制限スル^ルテ
即西訴訟法第三百九十五條及ヒ其立証方法ノ
更ニ擴張シテ^テ相手人ニ^テ迫^ルテ^テ面^前ニ^テ揮^寫セ^シメ^テ以^テ比^照ノ^吾面

ニ充^用ス^ルル^ルノ^ニ規^則ハ^之ヲ採^用セ^ザル^ルナ^リ

蓋本文第四百七条ニ規定スルノ要件ニ當アルニテ漏生国裁判規則第
一篇第十章第百五十五條ハレノアル国第百三十九條バレン国第
四百二十八條ウルトムバシク国第百五十四條バイルレ国第三百
七十七條ニ依リ即一ハ本篇第八節ノ理由説明ノ起點ニ述ハタル理由
ニ基キ本法第百六十七條第一解ニ依リ裁判所ハ層面比照ノ為人必
ズ鑑定人ノ意見ヲ聽ク一キ事務之アラサルトト一ハ裁判所ハ層面
比照ノ結果ト付テ任意ノ心証ノ以テ裁判スルトトニ是ナリ是故
ニ裁判所ハ層面比照ニ因リ其真正ナルコトハ証明セラレタリト者
做シ得テ而シテ猶ホ獨乙普通法ハレノアル国第百三十五條以下
及ヒバイルレ国第百三十八條ノ規定ノ如ク之ヲ証拠ナリト為ス
ノ事務ヲ負ハスレテ可トリ且又遺補ノ宣誓ノモ實認ルヘキノ責
ナキナリ

第二解制定ノ沿革 北部獨乙聯邦章程第六百六條第六百七條及ヒ
字漏生國中條第百三十七條ノ本聖ニ別異ナル所ハ即証書提出
手續ノ手續ノ本聖ニ全ク異ナル所ト及ヒ本法第百六條第百三項ノ如
キ嚴格ナル推測損失ヲ求メザル所トニ在リ且又字漏生國中條ニ
ハ本法ノ第四百七條ノ特別ノ掲載セス而シテ北部獨乙聯邦章程
第六百六條の法文ニ曰証書ノ真正ナルコト又ハ真正ナラザルコトノ
証拠並ニ証書ノ趣旨ヲ変更シタルコトノ証拠ニ付テ其立証方法ニ
關レテハ一般ノ立証規則ヲ適用ス云々又本法第百四十七條ノ規則
亦別異ナル行文ヲ以テ示シタル所他ノ中條ハ皆同シ而シテ本文ハ
異論ナキ採用セラレタリ

第三解真正ナルコトノ証拠ノ種類 真正ナル証書ハ反証
ノ物^類ハ亦分シテ証書タル一キナリ(本法第百四十二條第百三項及ヒ第百四

百三条並に此註解卷第一上ノ理由説明に因^ルル如ク元ト立証
方法ニハ制限之アラヌ故ニ宣明証拠ヲ以テスルモ可^トシト^ル本法
第四百九条第四百九条ノ第四解卷第一又本文第四百六条第一項ハ私
証旨に限ルニ非ラス上ノ第一解第一項卷第一

「第四解各面ノ比照第四百六条上ノ第一解」此各面比照ナル立証方
法ハ記号ニハ使用スヘカラスナリ「本法第四百四條第四百五條ノ
第一解各面」而シテ此立証方法ハ立証者自ラ比照スヘカ各面ヲ提出
スルニモ又ハ之カ為メ提出ノ申立ヲ為スニモ必スヤ本案ノ審理中
ニ申立サレヘカラス「本法第三百八十九條乃至第三百九十一條ノ第
二解第一解及ヒ第三百九十三條乃至第三百九十六條第四解各面而
シテ比照ニ供スル各面ノ真正ナルヲ証明ハ本文第四百六條第一
項ニ依リ立証者之ヲ申テ又ハ之ヲ命^ジ得ルノコトナラス
此等証ヲ為^ス後々再ヒ第四百六條第一項ニ依リ各面ノ比照ノ以テ
証明^シ得ルナリ此繁雜ハ又奇ト云フヘシ通例ハ立証者ハ比照ノ為
メ公正証旨又ハ本案訴訟ニ於テ認^テ得ル私証各例ヘハ本法第
七十六條ニ於テ委任^シテ選用スルナリ又証旨ノ一部分ニ付テ
ミ申^スハルニ付ニ於テハ其中^ニ真正ナルト認^メラレタ^ル他^ノ部分ヲ
比照各面ニ先用スルナリ得ルナリ「バカレ」固第四百二十六條第三
訴訟相手人ノ証旨提出義務ハ本文第四百六條第一項ニ於テハ此
場合ニ適用スヘキ本法ノ第三百八十七條第三百八十八條ヲ引用レ
アルニ依リ別ニ擴張セラルヘカ^シ然^ル而シテ真正ナルコトノ証
拠ハ尋ケラレタ^リト^キ審^理中^ニ所^ノ權利損失ハ之ヲ本法第三百九十
二條第四百九條ニ於テ採用セラレタ^ル原則ニ比較スル時ハ大ニ抵
觸^シ殊^ニ此第四百九條ノ趣意ヲ本法第三百八十九條乃至第三百九

十二条ノ第五解ニ述フル如ク之ヲ制限セサル中ハ則恰モ此条四而
九条トノ抵触ヲ見ルヘキナリ但本条第四九条第五解ニ依リ

第三者ニ対スル提出ノ申立ハ即本法第三九条及七条三百八
十九条第五ニ規定シテ明示本法第二百六十六条ハ本文第四百六

条第四項ニ依リ其旨面ハ比照旨面ニ相違スルコトヲモ含意高シアラサ
ル可ラサレバ故ニ稍難事ナリ○本文ト場合ニ於テハ固ト比照旨

ノ提出及ビ~~法律~~提出ノ付テ規定スル所ナルハ故ニ本法第三九
十九条ハ第三而二十条以下及七条三百七十条ト共ニ前ニ適用セラ

ルヘキナリ
第五解裁判官ノ裁判(本法第四八条及七上ノ第一解ニ依リ)裁判官

ハ親ノ鑑定人タルノ職掌ヲ施行シ得且通例ハ審ヲ所ノ鑑定人ヨリ
ハ通者スルヒノナリ而シテ裁判官ハ隨意ニ鑑定人ヲ用ルルモ固ト

コト妨グ之ヲ用ルル場合ハ本法第三十及三十一條ノ二項ニ從ヒ本
法第三百六十七條以下ノ規定ニ準拠シ之ヲ処理スルヤノミ又鑑定

人ノ意見ハ敢テ裁判官ヲ拘束スルコトナシ(本法第三百六十七條第一
解ニ依リ)

第四百八条(一)中ハルノ証者ヲ保管スルノ条
真正ナルコトヲ争ハレタル証者又ハ其趣旨ヲ変更シタルトシ証者

ハ本旨海法ノ完結スルマデ之ヲ裁判所書記官ニ保管スルニ但公衆ノ
秩序ニ関シ他ノ官廳ニ其証者ヲ交付スルコトヲ要セサル時ニ限リ

(理由説明制定沿革九ニ解款)各章條ニ同一ニレテ且異ナルヲ採用
セラレタル由本条ノ理由ハ即普通ノ証者旨奏ハ本法第三十三條

第二項ニ依リ只ニ或ル時間中一時裁判所ニ留置スル規定アリ此

本条、至リハ即ちハレタハ 証言ヲ許シテノ完結スルニモ、保管ス可シト命スル所ニ在ルナリ而シテ其証言ハ之ヲ調査ニ添付シ調査ト共ニ登記局ニ保管スヘキ事又ハ格別ニ之ヲ保管スヘキ事ニ付テハ侵海裁判所ノ判断上ノ命令ニ従フヘキ事トシ本法第三百九十九条ノ解釈糸巻

本条但書ノ取除ハ例一ハ其証言ノ刑事裁判所ニ引渡スルハ又ハ此ノ如キ証言ヲ永ク裁判所ニ留置スルハ猶守スヘキ法令ニ依リ許サレサル場合ヲ指スナリ(本法第三百九十七条第一解以下糸巻)

第四百九条 (証言ノ埋藏其他ノ関スルノ条) ~~原案第三十~~

厚被告ノ一方対々人ニ使用セシメサルノ故意ヲ以テ証言ヲ埋藏シ又ハ使用ニ堪ヘサラシムル時其証言ノ性質及ヒ趣旨ニ付テノ対々人ノ

主張ハ証明セラレタリシモノト看做スコトヲ得

第一解理由ノ説明及ヒ制定ノ沿革 本条ニ際シテ規定ハ字漏生法制(同国内国通法第一編第五百七十条裁判通則第一編第十百二十条)独乙新定ノ法制草律ニモ悉ク之アルナリ右ノ各法制ノ拠レルハ即ち普通法ナリ而シテ此普通法ノ解釈ニ於テ種々差別アルニ從テ各新定法制ニ亦種々ノ別ヲ為セリ
本案ハ北部独乙聯邦草律第六百条(條)ニ倣ヒ証言ヲ故意ニ埋藏セシメ又ハ使用ニ堪ヘサラシムル場合ニ付テノニ局限ニシテ刑法第二百七十四条第一糸巻

又立証者ハ其故意埋藏ノ証明スルニ共ニ其証言ノ性質及ヒ趣旨ニ付テ宣誓上申立ヲ為サ、ルハカラサルノ規定ヲ立ルハ元來本案ニノ採用セル証拠判断ノ自由ナル原則ニ背反ス是故ニ本案ニテハ

ノハ權利上關係ニ付テハ要求スヘカラス必ス事實ニ付テノニ要求
ス一キ性質ノモノナルトテ一定シテ我カ法律モ亦之ニ從ヒシ
ナリ然レ而レテ其事實タルヤ内部ノモノタルト外部ノモノタルト
ヲ問ハス例ヘハ誠實又ハ詐偽ノ行為尚ホウルトムベシ然レ而
六十三條ハイルン國第四五十八條迄乃ウルトムベシ然レ而
而七十三條ニ於テ

唯ニ信用シ又ハ信用セスト云フテニ付テハ其事實カ信モ証明スヘ
キ事實ヲ完成スルモノニ非ラサル限リ宣誓ノ要求ヲ許サス
トアルカ如キ意味ノモノナリ
而レテ其事實ハ裁判ヲ為スニ直接ニ又ハ唯同様ニ重要ナルモノト
ルヲモ問ハサルナリ但必ス其事實ハ本條ノ規定ニ拠リ本手人ノ行
為又ハ其前權利者若リハ代人ノ行為ニ依リテ其事件タラサル可ラサレ

十ノ五法第四而二十四條以下迄

北部獨乙聯邦章程ニ於テ其第六九條ハ唯相手人自己ノ行為ニ付
テノニ宣誓ヲ許ルシ又其第六十條ニテハ前權利者又ハ代人ヨリ
氣儘レシシ詔旨ノ真意ナルトニ付テ宣誓ヲ許スノ特定規則ヲ定ム
ル所ニ對シ非難シテ向是向テ内部ノ撞著ノ者過スル所ニシテ且不
相者ニ立記者ヲ制限スル規則ナリト
最終ニ曰前權利者及ヒ代人トアル其後ト意テハ民法ニ從フヘシ又
代人ニハ其者ノ行為ニ本人カ拘束セラル、者ヲモ包含スルモノト
知ルヘシ云々

第三解事實 偏ニ事實ヲ判定スルノニ付テ宣誓ノ申立アルモ之
ヲ許ルスヘカラサルナリ但本法第四而十六條迄知レ氏實際ニ於
テハ世而束行ハル、規則ヲ実行スルニ方テ稍寛假スル所アリテ即

此文字ヲ宣誓文中ニ掲クルモ但英文ヲ明カニスルノミト一
 般普通ニ解釈シテハ場合ニ之ヲ用フルトテ例ハ被告ハ品物ヲ
 買キノ注文ニ付キ豫期スル價ヲ以テ買入ル得ルヲ保存シテト云
 フ場合ト如キニ於ケルナリ之ニ反シ慣習法ノ存否ニ付キ又ハ所管
 ノ事實ニ付キ宣誓要求ヲ為スルハ之ヲ許ルサス
 又事實ハ許ルル一キモノト又ハ許ルル可ラサルモノナルトテ向ハ
 サルノミナラス犯罪ニ付テモ亦宣誓ヲ要求シ得ルナリ(本法実施法
 第十四条第一及ニ本法第百三十九条第百四十条ノ第四條其帝國高
 等商事裁判院判決録第十九卷(第百九)而シテ本法第三百四十九条第ニ
 ニ於テ明誓スル制裁ヲ法律上本人宣誓ニ付キ更ニ明言セサルハ蓋
 意アリテテ)本法第百四十一条ノ理由説明卷(第百九)
 (第四條)對手人ノ行為(本法第百四十五條ノ取除) 此行為ニハ原告
 兩造ニ共通スル行為ヲモ含ムナリ即例ハハ双務契約ノ締結ノ要是
 ナリ也此處ハ親族事實中ニ属セシムルトモ為シ得ルナリ○配偶
 夫ノ委任ノ授與ニ付キ其配偶婦ハ自己ニ對シ為サレタリ(再婚)又ハ
 自ラ親族シタル配偶夫ノ行為ニ限リ宣誓ヲ為スルヲ得
 無形人ノ行為トハ其法律上代人ハ適法ニ且適式ニ為シタル行為ニ
 限リ有能ナリ(本法第百四十五條第百四十六條第百四十七條第百四十八條
 對手人トハ何人ナリヤハ本法第百四十四條及ニ其註解ヲ見テ了解
 スヘシ○前權利者(上ノ第ニ解以下ニ付テモ亦然)蓋本法ニ於テハ
 其普通ノモノナルト特別ノモノナルトノ別ヲ立テサレナリ然レ而
 シテ代人ニ付テハ上ノ理由説明ニ述フル如キ弊失ヲ許スルノ解釈
 ニ拠ラズレテ可ナリ(本法第百三十一条第百三十一條第百三十二條第百三十三條第百三十四條
 代人モ亦之ニ属ス(本法第百七十二條第百七十三條第百七十四條第百七十五條第百七十六條第百七十七條第百七十八條第百七十九條第百八十條第百八十一條第百八十二條第百八十三條第百八十四條第百八十五條第百八十六條第百八十七條第百八十八條第百八十九條第百九十條第百九十一條第百九十二條第百九十三條第百九十四條第百九十五條第百九十六條第百九十七條第百九十八條第百九十九條)

第百一十條第一解及五解未定到底民法ノ規定ニ従フヘキトシ然レ
何レノ法律ト云ヒ世為レシムン行為カ拘束セリトハ各人ノ代人ト
認ムルノ規則ヲ定メサルヤ必セリ例ハ民法西民法第千三百八十
四條ニ依レハ父ハ未成年ノ家親ノ許スヘカラサル行為ニ付キ拘束
ヲ受クルトシ然ルニ世家親カ窃盜掠奪等ノ處カテ為人ノ代
人トハ認ムヘカラサルニ

全譯ノ議論中紛然タリト所ノ向點^註詳事筆記録未定即非^註不債本
人ハ許ヘラレタル保証人ノ代人タルヤノ向點ニ付テハ一概、然ルト
是ヲヘカラス然レ例ヘハ世保証ハ向來ニ為スヘキ不債ノ為メ不確
定ノ額ニ付テ為保シアリテ而シテ其不債ノ額ニ付テハラレル中
ノ如キハ不債本人ノ保証人ノ代人ナリト云フヲ増ヘシ之ニ反シ其
担保ノ効力カ懸論ニ係ルハ如キハ然ルヲ得ス

（債權人ノ主張）

夫ノ右ニ非ラサレハ左ナリト云フ如キ任意的主張ニ付テハ其ノ
セシ固ニ於テハ殊ニ之ヲ許サレシ民法ニテハ之ヲ許スルナリ帝
國高等商事裁判院判決録第百二十一卷第百二十二号未定

証骨ノ真正ナルトニ付テハ宣誓ニ関シテハ宜ク民法第百四而四條第
四而五條ノ第百四解及七條第百六條第百七條ノ第百三解ノ参照スヘ
キナリ

又反對証^{トシテ}宣誓ヲ申出^{トシテ}ル^{トシテ}許スル^{トシテ}一^{トシテ}民法宣誓法第百六
第百一及七本民法第百三而八十條乃至第百三而八十三條第百八解未定然レ
氏是ニ付テハ本民法第百四而十一條ニ著シテ制限ノ設ケテハナリ○
此様証ニ付テハ本民法第百四而十六條ノ参考スヘシ
宣誓ノ要求ヲ受ケタル一方カ^{本項}不真正ナル^{トシテ}他ノ立証
方法ニ依リ明カニスルノ權利ニ付テハ本民法第百四而十九條ヲ準用シ

ヲ可ナリ

第五解例外 抑宣誓要ルハ本法第四百十一条ノ場合ニハ局限セラル
 ル婚姻事件ニ於テモ亦然^ト本法第五百七十七条第三項^ニ又後見
 事件^ニ本法第六百十一条第二項第六百二十四条第六百二十六条^ニ
 及ヒ事實主^ニ次^ニ明^ニ示^{スル}ノ目的^ノ為^ニ本^ニ法^ニ第六百六十六条^ニ及ヒ
 於^テハ之^ヲ許^スル^レサ^レル^ナリ^ト而^シテ評定宣誓ハ已^ニ本^ニ法^ニ第六百
 六十条第二項ニ於テ廢止セラル^レル^ト世^ニ他^ノ制限^ニ各^ノ縣^ニ印^法ノ和
 解ス^ハカ^ラサ^ル事^件ニハ許^サル^カ如^ク制限^ハ全^ク廢止^セラ^レル^ト
 リ是^レ本^ニ法^ニ於^テハ宣誓^ハ主^ニ立^証方法^ノ一^ト定^メリ^ルニ職^由ス
 ル^ナリ^ト上^ノ第一解以下^ニ卷^ニ右^ト同^一ノ理由^ニ依^テテ猶^モ本^ニ法^ニ第四
 百十一条ノ^詳解^中ニ帝國^ニ高等^ニ商^事裁判^院ノ判決^例ヲ援^テテ^ルル^ル如
 ク偽^証ノ為^メ有^罪ノ文^渡ヲ受^ケル^者ノ他^ノ宣誓^力ヲ有^ルん^被
 告^人ニ^對シ^テカ^ラレ^ルメ^リト^シ然^レ本^ニ法^ニ第四百二十二条^ニ及ヒ^テ蓋^シ刑法^ニ第四
 百六十一条^ニ及ヒ^テハ唯^ニ宣誓^上ノ証^言及ヒ^テ鑑定^ノ無^効ヲ^ノ定^メテ更^ニ
 辱^殺告^白人^ノ宣誓^ハ及ヒ^テホ^ク所^テラ^ス必^ズ先^ニ理由^ヲ洗^明ス^ル云^フ如^ク偽
 証^ハ為^メ有^罪ノ文^渡ヲ受^ケル^者再^ニ更^ニ偽^証ヲ為^ステ^ラサ
 ル^ルト^ハ信用^ヲ措^キテ可^クナル^ハ否^トハ^ハ判^断ス^ル一^キハ^ハ即^チ宣誓^要
 求^ニ在^リテ法律^ノ敢^テ定^ケル^一キ^ハ所^テア^ラザ^ルナ^リ而^シテ^ハ有^罪ノ所
 為^ニ付^テテ^ハ宣誓^ニ關^シテ^ハ上^ノ第三解^又裁判^上ノ宣誓^ニ關^シテ^ハ
 本^ニ法^ニ第四百三十九条^ニ及ヒ^テ第二項^ヲ未^ダ看^ムヘ^ン

第四百十一条 宣誓要ルヲ制限スルノ意

宣誓要ルハ裁判所カ其反對ヲ證明セラレリト爲^シ認^ムル^事實^ニ付^テ
 ハ之^ヲ許^スル^ルセ^ルト^ス

第一解理由ノ説明及ニ制定ノ沿革 本条ノ規定ハ総ヘテノ法制ニ

於テ是認セラレアル原則ニ由リシノ宣誓要求ハ^{其本條上確乎シテ}事實ニ付テ之ヲ

依リ主張スル事實ハ裁判所ニ於テ証明シテト首認メラレ若クハ

破却セリト首認メラレ^ハソルテムブルグ国第五百七十四条第一

條其事實ハ現在ノ訴訟ニテ争ハル、トナレ故ニ今後ノ立証ノ条

項トシテ使用セラルヘキ効力ヲ有セサレナリ

ソルテムブルグ国訴訟法第五百七十五条ニ曰

裁判所ハ唯更ニ疏明シテアササルノミテラス尚ホ全ク真正トラス

ト見フル事實ノ状況ニ付キテ宣誓要求ヲ為ス申立タレテノ状

况テ精密ニ取調メタル後故ニ申立トシテ誓ナスヘキ權アリ

是レハソノフル国憲法第四百三十五条ニ於テ採用スル所ナリ也此

本條ニ於テム之ヲ採用セズ蓋右ニ法典ノ規定、自由ノ証拠判断主

張ニ於テ證據^{免カ}ルシテ免カス^也下ノ第二解亦免加之^本末無價五

ナル宣誓要求ハ之ヲ避クヘシト好メタル企圖ノ度スルニ適者ナリ

サレシニ云々

北部獨乙聯邦中條第六百一十一条第二項ハ本法實施法第十六条第一

項ニ定メタル^{規則}ノ明揭^也ハ其他ノ章條ハ本条ニ因レテモ

異テテ採用セラレケリ

第二解解勉 本法第四百一十条第三解第五解ニ於テ宣誓要求ヲ許シ

ス下ノ取除ニシテ如何ナルモノノ尚ホ存留スルヤ又ハ今ヤ全ク認

ムヘカラサルモノヲ^裁シ^テ是ニ因リ且本法第二百五十九条第

二項及ニ^世註解ニ依リテ以テ裁判官ハ其元來許サレヘキ宣誓ヲ^宣

裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣

裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣

裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣

裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣裁^判官^ハ其^元來^許サ^レヘ^キ宣^誓ヲ^宣

討リ自証セサル限ノ宣誓要求者其他ハ訴訟^{延滞}ノ為ニスルニ
トシテ却下スルノ判断カヲ許セサルナリ

概シテ反対ノ誓証ヲ許スヘク法律上推測スル場合ニ於テハ裁判^官

ハ其心証ニ頼リ証拠ハ証明セラレタリト認メ且之ニ対シテ為レリシ

宣誓要求ヲ尊重スルコトヲ得サントシテ^{本法實施法第十六條第一}

又犯罪ノ處為ニ^{刑八}ノ宣誓要求^{刑九}ノ^{刑十}本法第百十條第三條

未^刑元來反対証ヲ容クルヲ許サスト爲セ而カモ裁判官ハ刑事裁判

所ノ無罪ノ宣渡コリテ反対証ヲ採リ得^{本法實施法第十四條第一條}

急且^刑^刑申立テ却下スルヲ得ナリ

裁判官若シ証拠ハ真正ナリトシテ不^刑正ナルコトハ心証上若シモ

シル^{本法第百二十九條第一項未^刑刑}即別ニ証拠ヲ必要トセス且

証拠若クハ反対証ニ対シテ為ス宣誓要求ヲ却下スルコトヲ得^{帝國高等}

商事裁判院判決録第二卷第百二十條未^刑

第百二十二條 立証義務ニ^干任セサルノ^旨

立証義務ヲ有セサル原告ハ宣誓要求ニ依テ立証義務ヲ負フエトナ
キモノトス

理由說明制定沿革及ヒ^{訴訟} 本條ニ於テハ各原告ハ^論各^論

ハ重要ナル且本法第百四條第十條第百十一條ノ規則ニ^各適^各

ニ付テ宣誓ノ要^刑点^刑シ^刑得^刑ル^刑ノ^刑然^刑リ^刑而^刑シ^刑テ^刑若^刑シ^刑原告^刑而^刑送^刑

事實ニ関シ互ニ宣誓ノ要^刑点^刑ニ依^刑リ^刑テ^刑証^刑拠^刑ヲ^刑乏^刑ン^刑場合^刑ニ^刑方^刑テ^刑ハ^刑則^刑何^刑レ

ノ一方^刑ヨ^刑リ^刑テ^刑要^刑点^刑ニ依^刑ル^刑ヘ^刑キ^刑年^刑ヲ^刑得^刑ル^刑ヘ^刑シ^刑此^刑向^刑於^刑テ^刑付^刑テ^刑本

法^刑ノ^刑解^刑ス^刑ル^刑所^刑ハ^刑即^刑チ^刑立^刑証^刑ノ^刑務^刑ノ^刑何^刑レ^刑ニ^刑在^刑ル^刑ヲ^刑定^刑ム^刑ル^刑ノ^刑即^刑チ^刑立^刑証

ノ^刑務^刑ヲ^刑有^刑ル^刑者^刑ハ^刑宣^刑誓^刑ノ^刑要^刑点^刑ニ^刑注^刑意^刑ス^刑ル^刑ヘ^刑キ^刑ナ^刑リ^刑其^刑他^刑尚^刑士^刑疑^刑向^刑テ^刑リ^刑是^刑

ニ付テハ、^{大分}判例ハ實際上ニ必要ナシモノナク、即ち原被告ノ一方ハ立
証義務ハ自身ニ之ヲ負フモノトシテ、條件ヲ付シテ、立証ノ要求ハ得
ルヤ否^カニ宣明要求ヲシテ、ホノ条件ニ整属セシメレト欲スルノ意思
ハ之ヲ推定^{推定}キキテ、否^カニ向是^カテ、而シテ此問題ニ付キ本^格ハ兩
ツナ^カテ、然^ルト為スナリ云々

北郊獨乙聯邦章程第六百十三條第二項及ヒ法漏生國章程第三百八
十三條第二項ハ宣明要求者ハ宣明要求ト共ニ立証義務ヲ負フコトヲ
欲セサル時之ヲ明言ス可シト云フノ趣旨ニ由リ、他ノ章程ハ本条
ニ因シ而シテ採用ニハ異存ナラズ

蓋本条ハ立証義務ニハ更ニ干與スルコトナク、且之ニ付テハ裁判官ノ
判断スヘキモノト為レテ、以テ宣明要求ノ立証義務ニ関スル結果ニ
^本相抵触セシ^レ同法漏生法制ヲ解除シ^テ、^又其他ノ^コトニ付テハ本法
第百五十五條第五解^クス^ル者^ニハ

第四百十三條 (宣明ノ互取ニ関スルノ条)
宣明ノ互取要求ハ第四百十條ノ規則ニ從ヒ宣明要求ヲ許スヘキ場合
ニ限リ之ヲ許スルモノトス

宣明ノ互取要求ハ宣明ヲ要求セラレタル一方自己ノ行為又ハ親族ニ
付テ宣明義務ヲ有スルモ、付テ人ノ自己ノ行為又ハ親族ニ付テ宣明義
務ヲ有セサル時ハ之ヲ許サセラルモノトス

理由說明制定沿革及ヒ解釋 理由說明ハ單ニ他ノ法制及ヒ章程
ノ本条ニ因シテ規則ヲ按テ撰ニスルノ^コトニ、北郊獨乙聯邦章程第六
百十四條第二項ニハ私証付ノ真正ニ付テ、宣明ノ互取ヲ禁止ス、其
他ノ章程ハ本条ニ因シテ且本条ハ異存ナク採用セラレ^ルコト^ヲ、[○]第ニ

四章條ノ第四條ヲ刪除シテ本條ト合同シヨリ

原告被告兩造ニ共通セル行為及ヒ親驗本法第四百十條第四條解^布答^布

ハ本條第二項ノ場合ニ屬セサルナリ必竟^布此^布場合ニ在リハ即宣誓要

求者ハ要求セラレタル者ニ^布同^布ケルト同シク真正ナル^布ノ宣誓ヲ為

シ得^布ヘキナリ^布本法第四百二十四條^布條^布ノ共同訴訟人及ヒ法律上代

人ノ宣誓反^布求^布ニ付^布リハ本法第四百三十四條^布第四^布百^布三^布十五^布條^布並^布ニ^布其

註解^布ヲ^布參^布照^布ス^布一^布レ^布又^布本^布條^布ノ^布例^布外^布ノ^布場^布合^布ニ^布付^布リ^布ハ^布本^布法^布第^布四^布百^布十^布五^布條^布

ニ定メタリ

第四百十四條^布第一^布項^布第三^布者^布ニ^布宣^布誓^布要^布求^布ヲ^布為^布ス^布可^布ラ^布サル^布ノ^布條^布

宣誓ハ原告又ハ被告ニ對シテノ^布之^布ヲ^布要^布求^布シ^布又^布ハ^布反^布對^布ノ^布要^布求^布ヲ^布為^布ス

コトヲ得^布旁^布三^布者^布ニ^布對^布シ^布テ^布ハ^布之^布ヲ^布要^布求^布シ^布又^布ハ^布反^布對^布ノ^布要^布求^布ヲ^布為^布スコトヲ

得^布ス^布補^布助^布參^布加^布人^布ニ^布對^布ス^布ル^布宣^布誓^布ノ^布要^布求^布又^布ハ^布反^布對^布ノ^布要^布求^布ハ^布其^布參^布加^布人^布ノ^布本^布ヲ

ル^布原^布被^布告^布ノ^布共^布同^布訴^布訟^布人^布ト^布看^布做^布ス^布一^布キ^布時^布第^布六^布十^布六^布條^布ニ^布限^布リ^布之^布ヲ^布為^布スコ

ト^布得^布

一^布理^布由^布ノ^布說^布明^布及^布ヒ^布制^布定^布ノ^布詔^布董^布 本^布條^布ハ^布各^布章^布條^布ニ^布同^布シ^布且^布國^布法^布院^布委^布員^布會

ニ^布於^布テ^布異^布議^布ナ^布リ^布採^布用^布セ^布ラ^布レ^布タ^布リ^布而^布シ^布テ^布理^布由^布ノ^布說^布明^布ニ^布曰^布抑^布本^布條^布ノ^布規

定^布ハ^布即^布前^布推^布利^布者^布原^布推^布利^布者^布又^布ハ^布讓^布渡^布人^布及^布ヒ^布代^布人^布ニ^布宣^布誓^布ノ^布要^布求^布シ^布又^布ハ

反^布求^布ス^布ル^布一^布ノ^布許^布否^布ニ^布付^布リ^布ノ^布問^布題^布ヲ^布解^布ク^布ル^布ニ^布關^布シ^布テ^布蓋^布世^布讓^布渡^布人^布ニ

關^布シ^布テ^布ハ^布字^布漏^布生^布國^布裁^布判^布通^布則^布第^布一^布條^布第^布十^布章^布第^布二^布百^布七^布十^布九^布條^布並^布ニ^布第^布十

七^布章^布第^布二^布十^布六^布條^布ニ^布於^布テ^布ノ^布明^布カ^布ニ^布之^布ニ^布付^布キ^布規^布定^布シ^布テ^布ラ^布ス^布故^布ニ^布大^布ニ^布動^布

ク^布惹^布起^布シ^布テ^布レ^布新^布定^布ノ^布法^布制^布殊^布ニ^布訴^布訟^布法^布室^布ノ^布了^布數^布世^布果^布シ^布テ^布了^布數^布ナル

ヤ^布ハ^布之^布ノ^布保^布シ^布難^布シ^布ニ^布同^布意^布シ^布且^布本^布法^布第^布三^布百^布五^布十^布條^布第^布五^布ニ^布依^布シ^布ハ^布原^布被

告^布ノ^布推^布利^布者^布及^布ヒ^布代^布人^布ハ^布爭^布訟^布ニ^布係^布ル^布推^布利^布上^布關^布係^布ニ^布付^布キ^布其^布行^布為^布ヲ^布認^布人

トシテ証言スルニ義務アルカ故ニ終ニ動議ヲ排斥シテ又本条ハ
ハテレ国第五百二十七条第五百二十八条及ヒ其第五百二十三条ト反
対シテ但シ本法第六十四条第六十五条ノ原則ヲ恪遵シ補助参加人及
ヒ訴訟告知ニ因リ訴訟ニ参加シテ第三者カ主タル原告ノ一方
ノ共同訴訟人トナラサル限リ宣達ニ拠リテ取除キタル本法第六十
六条参見又訴訟能力ナク者ノ法律上代人ニ對スル宣達ノ要求又ハ
及對要求ニ付リテ本法第四百三十五条ニ於テ之ヲ定ム云々
北部獨逸聯邦章程第六百十条ニ定メタル例外ニ因レテハ宜ク本法
第四百十条第二條解ニ参見スヘシ

〔第二解原被告〕 前推利者例ハ豫渡人ニ宣達ノ要求スルハ本法
第四百十二条ニ依リ取除ケラル本法第三百四十八条第一條参見五
十条第一條天意就中本條ニテハ補助呼出人ノ制ヲ採用シ訴訟ノ制

ヲ採用セサルヲ以テ宣達ノ為メノミノ目的ヲ以テ呼出スルハ之アラ
サルナリ本法第六十九条第三條参見又本條訴訟ニ参加シタル訴訟
告知ノ受ケタル者ハ即本法第七十一条ニ從ヒ補助参加人トナント
以テ後ノ本法第六十六条ハ此参加人ニヒ適用セラルヘキナリ又共
同訴訟人ニ因レテハ本法第四百三十四条ヲ参見スヘシ○本条ノ例
外ニ付リテ本法第四百十五条ニ於テ之ヲ定ムル所アリ

第四百十五条 第四百十条第四百十三条第四百十四条ノ例外
裁判所ハ原告被告其ノ為スルハ宣達ニ付キ合意シ及ヒ其宣達ノ事實ニ
關係スル場合ニ於テハ第四百十条第四百十三条第四百十四条ニ掲
グル宣達ノ要求及ヒ及對要求ニ付リテ制限ヲ適用ス可カラサルコト
ヲ命ズル所得

一理由説明制定沿革及之解然 本条に付リハ先ツ本旨九例ヲ先照ス
一キナリ抑本条ノ原案ニハ五ヶ之裁判所ハ前記ノ制限ヲ適用ス可
ラサルトシ命シ得ル^文ニシテ原案第四而四条中ノ第一項ナリキ
然ルニ帝國集議院ニ於テハ之ヲ修正シ^也ハ原被告ノ相合意スハ
キ宣理ハ必ス事實ニ関係スルモノナラザル可ラス一ニハ原被告ノ
合意ハ裁判官ノ監督^{初判}下ニ立ツ一ヤ^テ希望シ^テリ
本条趣意ニハ自ラ^{初判}宣理ノ和解性質ヲ含意ス本条第四而十第
一解案^{初判}本条ハサツリセシ国許民法ニ於ケルコトプロミツサリセ、ア
イハ合意宣理ニ^{初判}影響タ^ルナリ
裁判所ハ即本条ニ依テ其合意上ノ宣理ヲ許スルト否トシテ裁断スル
ノ全権力ヲ有スルナリ彼ノ裁判官カ監視セサル可カラザル所ノ公
法上利益ノ動搖^{初判}至^{初判}甚^{初判}化^{初判}ス^{初判}レハ則^{初判}裁判官^{初判}掌^{初判}下^{初判}ハ拘束力ナ
キカ如ク且趣意^{初判}明^{初判}飛^{初判}ナ^{初判}ラザルモノ、如シ蓋裁判官ハ反^{初判}テ場合ノ
状況ニ從ヒ原被告合意ノ利害ニ付テ調査ス可ナリ然レ本条ハ唯本
法第四而十第第四而十三第第四而十四条ノミニ関係シ而シテ敢テ
本法第四而十一第第四而十二第第四而十八第第四而十九条ニハ干
渉セス且其宣理ノ文武ハ裁判官カ定^{初判}ム^{初判}所^{初判}ク^{初判}ト^{初判}シ^{初判}看^{初判}過^{初判}ス^{初判}可^{初判}カラ
ス本法第四而十六第第四而十七第第二解案^{初判}而シテ合意上ノ宣理
ヲ許スルニ付テハ裁判官ハ立^{初判}証^{初判}決^{初判}済^{初判}又ハ本案終局判決ニ於テ之
度^{初判}ヲ^{初判}為^{初判}シ^{初判}得^{初判}ル^{初判}ナリ

第四而十六条 一採証ノ条

一採証ノ申出ハ一定シテ指示スヘキ事實ニ付テ対千人ニ宣理ヲ要ホス
ルコトヲ陳述シテ之ヲ為ス

第四百七十七條、行手人ノ陳述ニ関スルノ条

宣誓ノ要求ヲ受ケケル原告又ハ被告ハ宣誓要示ニ関シ異議ヲ申立ル
時ト雖モ其宣誓ノ^{兼答}拒絶シ又反對ニ要示スルヤ其陳述ヲ可シ

原告又ハ被告陳述ヲ為スコトナク又ハ反對ニ要示スルコトヲ許容セ
ラレザル場合ニ於テ宣誓ノ制限レノ承諾スルコトナクシテ反對ニ

要示スル時ハ宣誓ノ拒絶シテト名做ス

「第一鮮制定ノ沿革」本文ニ至リ行文ハ各章梅ニ因シ而シテ異議ヲ

ク採用セラレタリ及テ政府提出ノ原案ニハ第三項ヲ設ケテ宣誓ノ
要求ヲ受ケケル者ノ再度宣誓ノ申立ヲ為サレル場合ニ付 ^{陳述}規程

ニ関シ規 定シアリタリ然レニ若シ之ヲ削除シテ本法第四百二十九條

ノ第一項ト掲テ掲テケリ○北部獨乙聯邦中梅第六百二十一条第三

項ニ依レハ本法第四百二十九條第二項ノ ^{主義}原則ニ此場合ニモ亦適用ス

アルナリ

「第二鮮理由ノ說明」本^文第四百十六條ノ趣旨ニ依レハ即宣誓要示

ニハ唯確乎指定スル中事實ニ付テ行手人ニ宣誓スルノ陳述ノミ

ヲ要スルナリ又宣誓ニ依ル中ニ屬スル各事實ヲ各箇別列ナラシムル

ニハ宣誓要示者カ宣誓文ヲ提示スル為メテ家簡便ノ手段トナスナ

リ蓋シ漏生國訴訟法草案梅第三百七條ハレノフル國第三百九十二條

ハバテシ國第五百三十三條第五百三十六條ニ於テ立証者 ^{宣誓文ヲ}提示スル

ハ立証方法ヲ失フコト定メタルハ即過度ト云フ可キナリ

本案ノ趣旨ニ於テハ役令女明文ヲ示サスニ要示セラレタル者ハ其

後ノ審理期日ニ於テ事件ノ結了マシテ陳述ヲ進出シ得ルコトハ勿論

ナリトス本法第四百二十七条第四項參看本文ノ例外ニ付テハ本法第
三百十九条第一項ニ於テ之ヲ定ム

第三解宣其文 本文第四百十六條ノ趣旨及ヒ上ノ理由説明ニ依リ
宣其文ノ提示ハ抹消ノ時之ヲ為シ得テ而シテ必ズ述ラサルヘトシ
スト云フニ非ラサルヲ知ルヘシ其宣其文ハ裁判所ノ確定スル所
ナリトシテ口答指シテ宣其文中出テ為スルハ其全般ヲ表スル事實ニ
付テ為ス場合ニ限リ之ヲ許スナリ然ラサル場合ニ在リハ必ズ抹
消ニ方テ一ニ其^立証^立極ノ式文ヲ提示セサル可ラス○本文第四百十六
条ニ掲クル一定ニ指示スル一キ事實ナリ決然ハ即申テラサレハ乙ト
指示スルニ兩般ノ宣其文中出テ為スル事モ包含スルナリ

第四解不從順ノ結果 本文第四百十七條ノ趣旨ハ原告ノ怠慢ニ
付テ嚴酷ナル制裁ヲ定メ即豫メ裁可スルヲナリ又權利^ノ損失ノ事ヲ
ス一キテテ明言スルヲナシテ宣其文ヲ拒ミタル結果ヲ被ハラシ

トシ本法第二^獨百九十五條乃至第二^排百九十七條第一解未^排過^排而レテ
是ニ付テハ^排控訴ニ^排裁^排ヲ^排裁^排ト^排排^排作^排シ得ルナリ○本法第四百九十三
条末^排過^排嚴^排ノ法制ヲ聊寬和セシムルハ即本法第四百十九條及ヒ
第四百二十^排條ナリ乃此第四百二十^排條ニ於テ全ク陳述ヲ為サレ場

合リ^場明^場定^場シ^場而^場レ^場テ^場条件^場ナ^場ク^場レ^場テ^場應^場ニ^場許^場ス^場一^場カ^場ラ^場サ^場ル^場宣其文ノ反^場亦^場
ハ及^場カ^場サ^場ル^場ナリ此第二^場場^場ノ^場合^場コ^場ソ^場即^場本^場文^場第^場四^場百^場十^場七^場条^場第^場二^場項^場ノ
恰^場モ^場適^場用^場セ^場ラ^場ル^場ト^場所^場ナ^場リ^場必^場ズ^場其^場權利^場損失^場ハ^場要^場求^場ヲ^場受^場ケ^場ル^場者^場カ^場宣
其^場要^場求^場ニ^場付^場テ^場陳^場述^場ス^場ヘ^場キ^場務^場リ^場有^場セ^場ント^場又^場ハ^場其^場先^場キ^場ニ^場為^場レ^場タ^場シ^場陳

述^場ヲ^場取^場消^場サ^場ル^場ト^場ニ^場関^場係^場ス^場ル^場ト^場○^場本^場法^場第^場四^場百^場十^場八^場条^場第^場四^場百^場十^場九^場条^場
參^場看^場例^場ハ^場他^場ノ^場証^場據^場ヲ^場立^場テ^場タ^場ル^場ニ^場因^場テ^場宣其文ノ反^場對^場ヲ^場明^場カ^場ニ^場シ^場タ
ル^場中^場ノ^場如^場キ^場ハ^場其^場宣其文^場拒^場絶^場ノ^場結^場果^場ハ^場有^場効^場ヲ^場ラ^場サ^場ル^場ナリ○^場本^場法^場第^場四^場百^場十

八条第二項(又或ハ他ノ証拠ヲ尋クルニ方テハ要求ヲ受ケル
者カ其以前ニ為シタル陳述ヲ取消スノ権利アルヤ勿論トス)本法第
四百十^九条第二項(又或ハ他ノ証拠ヲ尋クルニ方テハ要求ヲ受ケル
者カ其以前ニ為シタル陳述ヲ取消スノ権利アルヤ勿論トス)本法第

第四百十八条(他ノ立証方法ヲ許ルルコト及ヒ其効力ニ関スル條
宣禁ノ要求又ハ承諾又ハ反對要求ヲ為スニ因テ原告又ハ被告ノ一方
カ他ノ立証方法ヲ申立ルコトヲ禁スルコトナレ

他ノ立証方法ヲ申立ル時宣禁ハ其立証方法ヲ以テスル証拠ノ申出與
効ニ歸シタル場合ノ為メニノミ之ヲ要求シタルモノト看做ス

第四百十九条 (全上)

他ノ立証方法ヲ申立ル時宣禁ノ要求セラレタル原告又ハ被告ノ一方
ハ其立証方法ヲ採用シ又ハ他ノ方法ヲ以テ結了スルノ後再ヒ宣禁ノ
要求ヲ為スノ以前ニ於テ宣禁要求ニ付テ陳述ヲ為スノ義務ナキモノ
トス

他ノ証拠ヲ採用シタル時以前ニ為シタル陳述ハ之ヲ取消スコトヲ得

第一條制定ノ沿革及ヒ理由ノ説明 北部獨乙聯邦章程第六百二十

一條第四項ニハ心^實ヲ代表スルニ付テハ証拠ヲ全ク削除セ^ル字漏

生國章程第三百八十二條第一項ニ於テ亦同シ而シテ其第六百十三

條第一^項ニ於テ條件付ノ宣禁要求ヲ禁止シ終ニ其第六百二十二條

ニ於テハ即要求ヲ受ケタル者ノ陳述ニ義務ニ付テハ條件付ノ宣禁要求

ヲ條件付ケザル宣禁要求ノ場合ト同シカラシメタリ

右ノ最終ノ点ニ付テ字漏生國章程第三百八十七條第三項ハ第一回

格及ヒ第二回^{修正}章程^{修正}法^{修正}ト同一ノ規定ヲ採シテ蓋此ニ章程ノ行文ヲ

見ルニ条件付ノ宣誓要求ヲ許ルス丁及ビ心算ヲ表スルノ為メノ証拠
ヲ許ルス丁ノ志不判然ナラス且条件付ノ宣誓要求ニ付テノ陳述等
務ク他ノ証拠ノ結果ニ付テ為ス審理期日マテ延期セシメマンナリ
第一章程第三百九十四条第三項及ヒ第二章程第四
百零四第四項第三項參看

国務院憲法會ニ於テ原案第四百零四條第三項ノ現案ニ對シテ
九條第一項ノ行文ノ如ク修正シテ其行文ニテハ趣旨ノ
分ニ支離ハスニ足ラサシモノト信シ更ニ起草委員ノ囑レテ文書ノ
明瞭ヲ計ラレメタリ是ニ於テ予即起草委員ハ原案ノ第四百零四
條第四項現案ノ第四百十七條ノ第三項ヲ削除シ更ニ第四百零四
條第四項現案ノ第四百十八條第四項十九條ノ二條ニ新キニ加
ヘテ之レヲ修正ハ異議ナリ採用セラレタリ

理由説明ニ於テハ北部獨乙聯邦章程及ビサクセン國訴訟法ニ及レ
本條ニテハ必ス他ノ立法方法ノ中ニテ宣誓要求トノ併行ヲ許ルサ
ル一カラカントテ洗述シ且曰

抑立法者ニ於テ条件付ノ宣誓要求ヲ存スル丁ニ決シクハ以上ノ即
要求セラレタル宣誓ヲ概シテ補助ノ立法方法トシテ之ヲ承認シ
テ要求即之ヲ概スルハ宣誓要求カ他ノ立法方法ト相衝突スルハ
ハ後令ニ立法方法ヲ要求者ヨリ提出スルモ又ハ要求ヲ受ケタル者
ヨリ申立ルニ則チ第二ノ地位ニ退却セシトノ意ナリ此ノ如クナルハ
ハ則チ自ラ宣誓・要求ヲ減少シ且原被告両造ノ權利ヲ平均ナラシム
ルノ効果アリテ要求ヲ受ケタル者モ亦要求者ノ如ク其己ニ宣誓ヲ
要求セラレムニ拘ハラスル自己ノ材料トシテ供用シ得ヘキ立
証方法ハ之ヲ裁判所ニ提出シ得ルノ權利ヲ有セザル可ラサルナリ

此類等ニ依リ本條ニテハ原告又ハ被告ノ一方ヨリ宣誓要求アリ以テ
申出テタル証拠ノ事實ニ付キ相手人タル他ノ一方モ亦他ノ立証方
法ヲ以テ証拠ヲ申出テ得セシメ且之カ為メ別ニ規則ヲ設ケ以テ若
シ原告又ハ被告カ此權利ヲ實用シタルハ宣誓ハ唯其^他立証方法ヲ以
テスル証拠ノ申出カ有効ナラサル場合ニ限リ要求セラレタルモノ
ト爲做ス^トニ定メシ^リ
又心算ノ代表ナル証ハ避ケテ之ヲ採用セズ然レ獨乙普通法ニ於テ
ル此諸事ニ基ツク所ノ趣旨ハ之ヲ採用セリ蓋其趣旨ニシテ之ヲ採
用セハ即可ナリ之ヲ特別ナル^{法律}トシテ之ヲ明示スルハ本條ノ系
統ニ於テ冗贅ナルノミナラス尙ホ且既ニハレノフル國事會合ニ於
ケル動議ニ依リ經由徴スヘキ如ク却テ迷惑ヲ東タシ易ヤ可ナルハ
レ云々

又現據第四百十九條第一項ニ付キ理由說明ニ曰宣誓要求ニ付キ要
求ヲ受ケタル者カ陳述ヲ爲ム^トハ若シ主タル採証ニ於テ完全ナル
証拠ヲ成シ若クハ^{裁判}上ノ宣誓ヲ命スルマ^テ証拠ノ熟スルハ^{裁判}之^ハ
必要ト^スハ^カラサ^ルハ^ハ言フ俟タス但若シ他ノ証拠ノ有効ヲ期スルハ
ハ^適宜ニ陳述ヲ爲スモ可ナルノミ云々

此全ノ新加セラレタル本文第四百十九條第二項ニ付キ起中尋常ハ其
理由ヲ明示スル^トナシ然レ氏之推知スルハ敢テ難ヤニ非ラス蓋亦
法第四百十七條第二項ノ嚴格ナル規定ヲ顧ミテ修正本文第四百十
九條第一項ニ由レル結果ヲ明^示シ^ルモノナルヤ明^カラ^ズト^ス本條第
四百十六條第四百十七條第三條^終條

「第二條宣誓ト他ノ立証方法トノ衝突」抑本文第四百十八條第一項
ノ趣旨ハ二箇ノ^ハ重^要者ハ先キニ宣誓ヲ要求スルニセ

拘ハラス訴訟ノ進行ノ程度、於テ為レ得ル限リ、復シ他ノ立証方
法ヲ追用シ得且之ヲ宣誓要求ト共ニ為レ得ルノ意ニ要求ヲ受ケタ
ル者ハ宣誓ノ要求及ヒ之ニ對スル自己ノ陳述ノ為メ別ニ自己ノ有
スル九ノ立証方法ヲ使用スルヲ妨ケラレサルノ意ニ上
ノ第一解^{スル}及^テ而^{シテ}要求者又ハ被要求者、一方カホノ權利ヲ行使
スル場合ニハ則チ宣誓要求ハ条件付ノモノタルナリ(本文第四百十八
条第一項是也)若シ証拠物ノ真^ニ又ハ不^ニ真^ニ付キ宣誓要求者又
ハ被要求者カ他ノ立証方法ニ依リ完全ニ又ハ裁判上ノ宣誓ヲ命ズ
ルニ至ルマデ(上ノ第一解)証明シタル中ハ前ノ宣誓要求ニ拘泥スル
ヲ要セス(本法第四百十一条第二解以下各條後テ本法第四百七条
ニ於テ強制スル宣誓拒絕ノ結果モ亦其効力ヲ生ズルニ至ラセリナ
リ)本法第四百十六條第四百七条第一解以下各條然レモ本文第四
百十九條第二項ノ規定ニ拠リ其詳ル^{サレ}ヤ^ハ宣誓ノ反對要求ハ之
ヲ取消スリ以テ右各利アル^ニ謹慎ト為スナリ(上ノ第一解各條)

宣誓者其人並ニ宣誓事項ニ関スル本法第四百九條ハ取テ本文ノ
立証衝突ノ場合ニ干渉スル所之アラズ
[第三解] 宣誓カ補助ノ資^ニ後トナル(一) 宣誓要求者又ハ被要求者ヨリ
他ノ立証方法ヲ申立タル中ハ本文第四百九條ニ從ヒ宣誓要求
ハ又被要求者ノ陳述義務ノ關係ニ於テ補助ノ資^ニ後ト為スニ至ルナ
リ蓋被要求者ハ本法第四百七條ニ依リ自ら負フタル陳述ノ義務
ヲ他ノ立証方法カ提出セラレ又ハ其他結^ス例^ハハ相^ト者ノ棄却^ハ本法
第四百六十四條第四百一条各條ニ至ンマデ停止シ得而レシ此場合
ニハ要求者ハ必ス先ツ再ヒ要求ヲ為ケルハカラス否ラケルハ則チ
遂ニ要求ヲ廢^スカスルヘシ必^シ先^ニ一方^ヲノ^再要求^ヲ再^ヒ中^ニ止^ム事^ト時^ニ也

ヒ申立テサル前又裁判官カ被要求者ニ其陳述ノ未ク之アラサル
ヲ注告スルノ亦ニハ〔本法第四百二十条〕其為サ、ル陳述ニ付テノ豫
審本法第四百十七条ハ開始スルヲ得サルナリ

他ノ立証方法ヲ進出スルヲ得ルカ故ニ上ノ第三解未竟又被
要求者カ或ル状況ニ從テハ早ク陳述ヲ為スヲ必要トセラル、トア
ル一ク又ハ被要求者任意ニ之ヲ為スヲモアル一レ〔然レ是果レテ利
便ナラサルヘニ何レニレテモ此場合ニ於テハ本文第四百十九条第
二項ニ依テ先キニ為レタル陳述ノ取消ヲ為シ得ルナリ〕〔本法第四百
二十二条第四百二十三条未竟而レテ〕本文ニテハ要求者ノ取消権ヲ
モ定メアラサルハ明瞭ナリ此取消権ニ付テハ本法第四百二十一条
乃至第四百二十三条第三解ヲ參照スヘシ

又被要求者ハ必要ノ場合ニハ其取消ト異ニ新クナリ陳述ヲ為スヘ
キトアリ然レハ被要求者ハ宣誓ヲ承諾セント欲セハ則チ新ク本法第
四百二十条ニ依リ裁判官ノ命^{催告}アマン新クナル陳述ヲ為サ、ル
ヲ得

第四百二十条 〔裁判官ノ催告ニ因スルニ至〕
宣誓要求ニ付テ陳述ヲ為サ、ル場合ニ於テハ原告ノ一方カ裁判所

ヨリ宣誓ニ付テ陳述ス可キコトノ催告ヲ受ケタル時ニ限り宣誓ヲ拒
ミタリト看做スコトヲ得

〔理由說明制定沿革及ヒ解説〕 他ノ各章條ノ趣意ハ本法第四百十七
条ノ嚴格ナル規定ニ相当シ特リ北部獨乙聯邦中條第六百二十一条
第三項ハ僅カニ寛ナルカ如キナルニモ拘ハラズ〔本法第四百十六
条第四百十七条第一解未竟〕帝國々裁判官負ハ右ノ主事ハ必竟宣誓要

ホニ付テノ陳述ハ新ク^遺忘ルシ易キモノナリ故ニ殊ニ嚴酷ナリト
者認メテ而シテ此本条ヲ採用シテ其現今ノ編次ニ歸シテ起中
委員ノ修正セシ所ナリ

本条ノ制定ノ沿革及ヒ世行文ニ後ハ即為サ、ル陳述ニ付テ定々
ル所ニレテ反對詳サ、ル陳述ヲ指スニ非ラズ本法第百四十六條第
四百七十七條等三解案也

又本条ノ趣旨及ヒ位地ニ依レ、即此規則ハ本法第百四十八條第
百十九條ノ場合ニモ適用ス一ヤノミナラス此二條ノ場メニハ殊ニ
便宜アル所ナリ

本条ニ類肖同義ノ規則ハ即本法第百十九條第百四十六
十八條ナリトス

第四百二十一条 (一) 及ホシテ人宣授ヲ承諾スルノ途
及対等ホテ為サレタル宣授ハ其承諾ニ付キ明カニ陳述セサルモ立証
者之ノ承諾シタルモノト看做ス

第四百二十二条 (一) 陳述ノ取消ニ関スル途

宣授ノ反對要求ハ第百四十九條第百二項ノ場合ヲ除クノ外宣授事務者
知リテ故クニ宣授事務ニ背キタルニ付キ言渡シタル判決確定シタ
ル時又ハ対手人宣授ノ反對要求シタル後始メテ其言渡ヲ知ラシムル
コトヲ明示スル時之ヲ取消スコトヲ得

第四百二十三条 (一) 同上

宣授ノ承諾又ハ反對要求ハ第百四十九條第百二項及ヒ第百二十二條

ノ場合ヲ除クノ外之ヲ取消スコトヲ得ス

〔第一解制定ノ沿革〕 本文第四百二十一条ハ各草條ニ於テ同一ノ
又異議ナク採用セラレタリ又本文第四百二十二条ニ於テハ北部獨
乙聯邦中條ヲ除クノ他ノ各中條ニ同シク宣誓要求ノ取消ヲモ許ル
ス志セナリ故ニ本文第四百二十三條ノ規定ヲ亦宣誓要求ニモ及ホ
サレムナリ○北部獨乙聯邦中條第六百十九条ニ於ケル取消ニ付
テノ規則ハ大ニ差異レテ取テ比照シ難ハス

国務院委員会ニ於ケル修正ニ関シテ本法第四百十八條第四百十九
条第一條ニ述フル所ハ本文ニモ適用スヘク而シテ現案行文ノ理由
ハ判然セサルナリ又茲ニ宣誓ノ性質ハ和解ヨリモ又ハ立証方法ヨ
リモ〔本法第四百十條第一條參照〕更ニ重キモノト為ル一キヤ果シテ
然ラトセハ即原被告トシテ勸調宣誓ニ付テ為レムン陳述ハ原被告ノ

拘束ス一キヤ否トノ大疑問ヲ惹起シタリ而シテ本條ノ宣誓要
求ノ條件付ナルト及ヒ心安代表ヲ許ルストテ親シハ本法第四百十
八條第四百十九条並ニ世註解參照則到底契約主等ハ本文ニ行ハレ
難キヲ知ルヘシ

〔第二解理由ノ說明〕 本文第四百二十一条ニ於ケル即字漏生國裁判
通則第一條第一條第十條第二條九十六條及ヒ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
十條ヲ以テ定ムル所ノ宣誓及ホテ取消スルニ付テノ要求者ノ陳
述ヲ要スル規定ヲ採ラズ

宣誓ノ反對要求ヲ許ルヌクニ對スル異議ヲ要求者ヨリ存ハサルナ
リ若シ此異議ナカリセム則テ要求者ノ宣誓母ニ付テノ陳述ハ無異宣
ノ虚式ニ過キヤシヘシ

宣誓ニ移者知リツク其宣誓義務ニ背キタムニ因リ言渡しムン判決

ルナリ(本法第百四而三十二条第百三十三条第百五解)矢

第百四解(宣明)ノ反対要求又ハ承諾ノ取消 本文第百四而二十二条第百四

而二十三条ト及ヒ本法第百四而十九条第百二項ト依リ宣明要求ト他

ノ立証方法ト相衝突スルハ宣明ノ要求並ニ宣明ノ承諾ノ取消

得ル^得トハ取^取テ^テ候^候タ^タス然^然レ^レ凡^凡宣明ノ要求者^{又ハ}被^被要求者^者ノ一方

カ各地ノ立証方法ヲ申立ル^トソ^ソ為^為サ^サル^ルハ即^即本文第百四而二十三

条ニ依リ宣明ノ承諾ハ之ヲ取消ス^トソ^ソ得^得ル唯^唯宣明ノ反対要求ヲ代

用ス^ヘキ^ノミ^之ニ反^レテ^テ反対要求ハ本法第百四而十九条ノ要件アル^ハキ

之ヲ取消ス^トソ^ソ得^得ル^又宣明ノ承諾^レ得^得ヘ^キナ^リ而^レテ^テ宣明ノ反

対要求ヲ取消ス^レ付^キ要件付^付利^利便^便ノ確定^后ノ結果^ニ因^レテ^テ宣明ノ

本法第百四而三十二条第百四而三十三条並ニ其注解ヲ参照ス^ヘシ

本文第百四而二十二条ニ於^ケル^ル明^示ニ付^テハ本法第百二而六十六条ヲ

参照ス^ヘシ

第百四而二十四条 (宣明) 程式ノ条

宣明ノ義務者ノ行為タル^ル事實又ハ其親^臨ノ事件タリ^レ事實ニ付^テハ左ノ

宣明ヲ為^スヘ^キモ^ノトス

事實ハ^正實^事ナ^リ又^ハ真^實ナ^ラス

其事務ノ宣明ノ義務者ノ相手人ヨリ主張^レ及^ヒ其事務者^ト対^シ場合ノ

状況ニ依^リ其^正實^事ノ^正實^事ナ^リ又^ハ真^實ナ^ラサル^{コト}ヲ^指ス^ハシ^ムル^ヲ

得^ルヘ^キラ^サル^{コト}時^ニ裁^判所^ハ申^立ニ^依テ^テ左^ノ宣明ヲ^為ス^可キ^{コト}ヲ^命ジ

得

宣明ノ義務者注意^シテ^テ検査又ハ探^訪ヲ^為シ^タル^後其^正實^事ノ^正實^事又^ハ

真^實ナ^ラサル^{コト}ノ^心志^ヲ得^タリ

テ此ノ如キ探索ノ為レリヤ不リ^{審明}ニ得ルヤ云々

第二解制定ノ沿革 教種ノ修正動議アリシモ皆批棄セラレタリ又

六章條目一ナリ

第三解心証宣誓 単ニ知^知ル^地ル^ト又ハ信用スル^トニ付キ宣誓スル

場合ノ外ハ本条第二項第三項ノ場合ニ付キ宣誓ヲ為スヘクシテ即

宣誓ヲ務者カ注意シテ^理査シ又ハ控防シタル^理後由ニ基ツキ自己ノ

心証ヲ保^保確^確シテ証明スルナリ然レテ此第二項第三項ノ或文ハ

相異ナルハ即真^真正^正ナルコト又ハ真^真正^正ナラザルコト^付自己ノ心証ヲ

確^確言^言スル^ル本^本条^条第^第三^三項^項ノ場合ニ^指在^在リ^ハ單

ニ心証ヲ得^得ル^ルト得^得ザル^ルト^確言^言ス^ス一^一キ^キナ^ナリ^蓋第^第二^二項^項ノ或文ハ第

三項^三ノ^ノ嚴^嚴肅^肅ノ意^意ヲ有^有ス^蓋宣誓ヲ務者自己ノ行為又ハ親^親族^族ニ付

キ証明^明レ且^且例^例外^外ノ場合ヲ規定スル^以テ^嚴肅^肅ニ^作シ^シル^ハ母^母者^者ト云

フハシ

而レテ其主張スル事實ハ宣誓ヲ務者其人ニ關スルモノナルハ則

テ本条第二項ノ特別ニ依ル^テ得^ルル^必ズ^本条^条第^第一^一項^項ノ^通規^規ニ^依テ^テサ

ル可^可ラス

又本條第三項ハ本法第四百十條ニ掲^掲グル^ル前^前推^推利^利者^者又ハ代^代人^人ノ行為

又ハ親^親族^族ニ付^付テ^為ス^宣誓^誓ニ^モ及^及ホ^ホス^一キ^キナ^ナリ

採^採取^取ニ^關シ^テハ^本法^法第^第四^四百^百四^四十^十條^條ハ^至第^第四^四百^百四^四十^十六^六條^條ヲ^參照^照ス^ハ

シ

第四百二十五條 宣誓ニ付^テル^ル終^終局^局判^判決^決ニ^關ス^ルニ^至

宣誓ヲ為スニ付^テル^ル條^條件^件付^テル^ル終^終局^局判^判決^決ヲ^以テ^テ支^支渡^渡ス^可シ

其^其宣^宣誓^誓ハ^判決^決確^確定^定ノ^後初^初メ^メテ^之ヲ^為ス^モノ^トス

出浦

丁之行

何者之抄七枚

る抄

まらぬのき

獨乙訴訟法釋義 第七二稿

六十七枚六行「第二篇完了」

第四百二十六條 宣誓ニ付テノ立証決議及ヒ中間判決ニ関スル
ノ條

原被告宣誓ノ重要ナルコト又ハ行文ニ付キ同意シタル時又ハ宣誓力
中間訴訟ノ^{見結}為メニ有用ナル時ハ立証決議ヲ以テ宣誓ヲ為スハ
キコトヲ命令スルヲ得

各箇獨立ノ攻撃方法及ヒ保護方法ニ付テノ裁判カ宣誓ニ依テ定マル
時ハ立証決議ヲ以テ宣誓ヲ命レ又ハ條件付ノ中間判決ヲ以テ宣誓ノ
言渡スコトヲ得此言渡ヲ為シタル場合ニ於テ其宣誓ハ訴訟ノ終局裁
判ノ為メ尚ホ之ヲ要スヘキコトヲ條件付終局判決ヲ以テ言渡し其確
定シタル時ニ限り為スモノトス

第四百二十七條 宣誓ニ付テノ判決ノ趣旨(明示) 宣告

條件附判決ニハ宣誓文及ヒ宣誓ヲ為シタルコト又ハ為サシムルコトノ
結果ヲ事件ノ現状ニ於テ為レ得ヘキ限り成ル一ク詳細ニ確定ス可キ
モノトス

此結果ハ終局判決ヲ以テ之ヲ言渡ス

第一解理由説明 抑本文第四百二十五條ニ於テハ宣誓並ニ補助立

証方法ノ^{手段}及ヒ元末宣誓ハ袖理ナシモノト定ムルニ由テ

自ラ要スル所ノ應用又ハ韃語ノ宣誓ヲ豫防セシカ為メ宣誓ヲ為ス
ニ付テハ條件付ノ終局判決ヲ以テ之ヲ言渡ス可キ規則ヲ明定レ且
之ニ添ヘテ宣誓ハ其判決ノ確定シタル後始メテ之ヲ為ス可キモノ
トノ規則ヲ掲ケタリ而シテ本文第四百二十六條ニ至テ右ノ例
外アルコトヲ定メタリ乃此條ニ依レハ裁判所ニ付共スルニ其見込

依り条件付終局判決ニ代ハテ立証決議ヲ以テ宣誓ヲ為スハキ命命
ヲ言渡し得ルノ職推テ以テシテハ本法第三百二十四条第四条迄此
場合三アノ即ケ(甲)原告カ宣誓ノ推利上重要ナルコト又ハ其文面
ニ付同意シタル時(乙)宣誓カ中間訴訟ノ終了ノ為メニ有用ナル時(丙)
各箇ノ攻撃方法又ハ弁護方法ノ裁判カ宣誓ニ依テ定マルハキ時是
レナリ

然ルニ又前項(丙)ノ場合ニ付テハ即本法第三百三十七条ノ規則ヲ以テ
完然ナル利便ノ効用ヲ保有セシメシカ為メ復々其宣誓ヲ為スコトヲ
条件付中間判決ヲ以テモ之ヲ言渡し得ルノ必要アリシ若シ然ラ
サリセハ上末口頭審理ノ材料ヲ分離シ若シハ簡約ナラシムルカ為
メ類ニ採用シタル法例趣意及ヒ各箇ノ攻撃方法弁護方法ニ付テノ
採証ノ手續ノ如キハ頓ニ無用ノ冗贅ニ陥ルヘケレハナリ蓋中間判

決ノ性質タルヤ終局判決ノ一成分ニシテ而カモ其条件付中間判決
ヲ以テ言渡しタル宣誓ハ訴訟ノ終局裁判ノ為メ尚ホ宣誓ヲ要スル
コトヲ条件付終局判決ヲ以テ言渡し得ルヲ確定シタル後初メテ之
ヲ行フ可キ所ハ即本文第四百二十五条第二項ノ原則ニ適当ス
又本文第四百二十五条ノ例外ハ本法第五百五十八条ニ於テ之ヲ見
ルナリ同条ニ依レハ即証旨訴訟及ヒ為換訴訟ニ於テハ宣誓ヲ為ス
ハキ命令ハ偏ニ立証決議ヲ以テノ言渡し得ルナリ
本文第四百二十七条第一項ノ規定ハ然レト全般ニ行ハルノ所ノ許
訟法例ナリ而シテ字漏生訴訟法草案按第五百四十三条、明掲スルカ
如ク殊ニ費用ノ点ニ付テノ裁判ハ後日ノ判決ノ為メ留保セラレ得
ルナリ

条件付終局判決ニ明言スル結果ノ到末ヲ宣告スル終局判決ハ本法

第六百四十八条第二ニ依リ申立ナレト虽モ仮執行ヲ为レ得ヘレト
宣言スルナリ

〔第二解制定ノ沿革〕 此部独乙聯邦草案第六百二十四条ニ於テハ即
宣誓ヲ言渡スル程式及ヒ方法ハ一ニ裁判官ノ見込ニ放任シ且其第
六而二十五条ハ本法第四而二十七条第二項ニ符合ス又字漏生草案
第三而九十条ハ本法第四而二十六条第二項ノ規定ヲ採用シテラス
此他ハ各草案皆相同シ

国議院委員会ニ於テ其第一讀会ニ方テ条件付終局判決トアルニ對
シ偽誓ヲ侵カスノ危懼アリトノ理由ニテ動議アリタリ蓋理由ナキ
ニ非ラサルヘレ而レテ種々ノ修正提提出セラレタルニモ拘ハラス
終ニ原案ノ條ニテ通過シタリ又起草委員ハ本文第四而二十六条ノ
重要ナルコトノ上ニ之アリシ推利上ノ文字ヲ削除シタリ然レ氏此

削除ニ付テハ議事録ニ記載シテアリサルノミナラス又テ国議院委員
ノ勧告ニ從テ更ニ修正ヲ加ヘスト明記ス蓋誤謬タルヤ明カナリ

〔第三解宣誓ノ判決〕 蓋判決ハ本文第四而二十五条第四而二十六条
ニ依レハ即申終局判決ニ上訴^{ニ付}シテ不服ヲ申立テ得ヘク本法第四
而七十二条第五而七条末着且之ヲ規則ト为スモノ上ノ第一解末着
〔乙〕中間判決ナリ本法第二而七十五条末着是レ裁判官ヲ拘束スルノ
能カラ有ス本法第二而八十九条末着然レ氏終局判決ニ對スル上訴
ト共ニ为ス片ニ限リ不服ヲ申立テ得ルナリ〔本法第二而七十二
条乃至第二而七十五条第五解末着然リ而レテ若シ^別他^ニ異ナル
宣誓ノ判決方法アルモト仮定スルモ申必ス本文第四而二十七条
ノ依^テテ判決ニ付キ規定シタル法第ニ從ヒ宣誓ヲ为シタルコト又
ハ之ヲ为サレルコトノ結果ヲ確示ス可キナリ但此主張ハサツクセン

国許法手続に於ける単ニ宣せられたる結果ノミヲ示ス規
定ニハ抵觸スルナリ

前項ニ準クル結果ノ確示ハ^{即本}法第百九十三條並ニ其第一解ニ

依リ帝ニ判決ノ理由中ニ於テスルノミナラス必ス判決文中ニ明示

スルヲ要ス加之裁判官ハ原告ヲシテ必要ノ會得ヲ為サシムルカ

為メ努メテ詳細ニ示定スヘキナリ但便宜ヲ期スル為メ斟酌スルナ

ハ敢テ禁スルニハ非ラス^{即宣}上ノ第一解第四項末句何レトナレハ禁ノ

複雑多岐ナル^{一々}場合^ハ即各種ノ場合ヲ豫想シ尽シテ之ヲ確

示スルナリ到底為レ難ハサル々之アレハナリ

蓋法律上許ルス^ハ法律ノ命スルニ非ラス^ハ所ノ中間判決ヲ為ス場合ハ

第一解ニ準クル^ハ乙及丙ノ^時事柄ニ在テ存スルナリ然ルニ理由説明

ニ特リ^ハ丙ノ場合ノミヲ準テ説明シタルハ必克^ハ丙ノ場合ニ付テハ別

段ナリ規則ノ必要トセシニ由ルノミ而シテ尚ホ宜ク本法第百二十七

十二條乃至第百七十五條第五解ヲ参照スヘシ

第四解宣せ^ニ付テハ立証^ハ後本法第百二十四條第四款^ハ中間

訴訟ノ^{場合}為メ及^ハ乙及丙ノ^時攻撃方法又ハ^ハ保護方法ニ付テハ

裁判ノ為メ法律上^ハ宣せ^ニ付テハ立証^ハ後ヲ為レ得^ハ法ノ命スルニ非

ラス^ルトニ關シテハ本法第百七十二条乃至第百七十五條第五

解ヲ参照スヘシ

抑亦文第百二十六條第一項ノ前段ニ於ケル^ハ奇異ナル規則ハ即字

漏生^ハ国裁判通則第一編第十章第百三十五條ヨリ^ハ採取シタル所ナリ該

条ニ曰

宣せ^ニ依テ^ハ案知ヤラ^ル可キ^ハ事實ノ重要ナルコトニ付キ自ラ更ニ疑

フ所ナク^ハ原告被告ハ其一方カ^ハ宣せ^ニスルコトニ^ハ合意シ又宣せ^ヲ為スヘ

上末詳述スルカ如ク本文第四百二十六条末段、規則ハ立証決議及
ヒ同条第一項、場合若クハ中間訴訟上ノ第三解朱急ニ付テ、宣誓
、中間判決ニハ関係ヲ及ボサ、ル所ナリ是故ニ此場合ニ在テハ直
チニ宣誓、実行ヲ命ジ得ルナリ

「第六解明示宣告」 本文第四百二十七条第二項ニ依リ若シ中間判決
又ハ終局判決ヲ以テ宣誓ヲ言渡シタル時ハ必ス其宣誓ヲ為シタル
コト又ハ之ヲ為サシムコト、結果ヲ終局判決中ニ明言セサル可ラ
サルナリ而シテ直チニ実行セシムル中間判決ニ付テモ亦同シ

「上ノ第五解朱急」○宣誓ニ付テリ立証決議ハ本文第四百二十七条第
二項、範圍内ニ属スルナリ且立証決議ニ於テハ宣誓、結果ニ付
キ敢テ定ムルナリ是レ必竟終局判決ニ於テ初メテ定ムルナリ
ナレハナリ

又本文第四百二十七条第二項ノ規則ニ依レハ即本法第四百三十条
ニ據リ只ニ宣誓拒否ノコトノミヲ明言シ反テ其結果ニ付テハ明言
セサル趣意ヲ解シ得ハレ^加此第四百二十七条第二項ニ於テ宣誓
ヲ為スコト又ハ之ヲ為サシムル結果ニ付キ一、期日ニ於テ
第二項^{五十八}条ニ準拠シ^心ス審理セラル可キ意ヲ示シ^本本法第四百
審理ヲ為サシムル可キナル

二十八条第四百二十九条朱急且此明示宣告ニ付シテ●普通ノ上訴
「本法第四百七十二条第四百七条朱急」ヲ詳ルスノ身ヲ明ニシテ
以意^テ明定シテ以テ後末独乙普通法及ヒ各聯邦法上ノ争点ヲ理
解^理得タルナリ

証拠提出宣誓ニ関シテハ本法第三百八十九条乃至第三百九十二条
ヲ参照スヘシ又明告宣誓ニ付テハ特別ノ法制^定「本法第七百八
十一条以下ヲ定メアリテ」本文第四百二十七条ノ例外ト為ス

第四百二十八条 (宣誓ヲ为シタル結果ニ関スル条)

宣誓ハ誓フタル事實ノ完全ナル証拠ヲ成スモノトス

反対ノ証拠ハ宣誓義務ニ背反シタルニ因リ確定判決ニ対シ不服ノ申立ヲ为シ得ルト同一ナル要件アルキニ限り之ヲ為スコトヲ得

第四百二十九条 (宣誓ヲ免除シ又ハ拒絶シタル結果)

対手人ヨリ为ス宣誓ノ免除ハ宣誓ヲ为シタルト同一ナル効力ヲ有スルモノトス

宣誓ノ拒絶ハ宣誓スルキ事實ノ反対ヲ完全ニ証明シタルト看做スノ結果ヲ生ズルモノトス

第四百三十条 (宣誓義務者缺席スル場合ノ条)

宣誓義務者宣誓ヲ行フ为メニ定メラレタル期日ニ出廷セサル時ハ申立ニ因リ缺席判決ヲ以テ宣誓ヲ拒絶シタルト看做スノ言渡ヲ为スコトヲ得

第一解理由説明 本文第四百二十八条第四百二十九条ニ於ケル宣

誓ノ執行免除及ヒ拒絶ニ関スル規則ハ^即証拠法ノ規則ニ基ツケル
既本法第二百五十九条第二項^即自由ノ証拠判断ヲ
取除キアリ且宣誓要求ノ和解性質ニ適當シ而シテ新定ノ立法例規
ニ符合スルモノナリ

本文第四百二十八条第二項ハ即本法第五百四十三条第一ノ成果ヲ
ルナリ

又本文第四百三十条ニ付リハ本法第三百十二条第二項ノ説明ニ於

「既」に説述し了せり

「第二解制定」沿革 本文第四而二十八条第四而二十九条ニ付テハ
各章按差異ニル所ナシ又此行文修正ノ動議アリシモ自ラ抛棄シ別
ニ異論ナカリシ而シテ字漏生国章按第三而九十四条ニテハ宣誓者
務者缺席スル時ハ宣誓拒絶トシテ審理ヲ進行セシムルノ趣アリ
北部独ニ聯邦中按第六而二十六条モ亦之ニ同シト雖モ^又判決更正ノ
性質ノ手續ヲ許ルシアハナリ 本文第四而三十条ハ亦各章按ト皆相
同シ

「第三解宣誓」行フコト 前項ニ奉リテ修正議ノ趣アリ即奉証者ニ
シテ宣誓スヘキ場合ニ在テハ証拠カ奉リタルモノト立渡サレ又反
証者ノ宣誓スヘキ場合ナレハ其証拠カ奉カラサルモノト立渡サル
ハシト云フニ在リ此ノ如クスルハ則例ハハ事實ノ不真正ニ付キ

宣誓ヲ為ス片^{本法}第四而二十四条^其宣誓文ノ反對カ完全ニ証明セ
ラレタルモノト看做サレノ嫌アリ然レモ^其宣誓ハ^其宣誓文ノ完全ニ証
第一項ノ目的ハ^右ニ外ナラサルナリ乃宣誓モタル事實ハ完全ニ証
明セラレタリト看做ス意ニシテ即其宣誓文ノ如何ニ從ヒ真正又
ハ真正ナラサル事實ト認ムルノミ

本文第四而二十八条第二項ニ於テ定ムル反對証拠ヲ提出シ得ルハ
独リ再審手續ノ判決更正ノ手段ニ依ルノ他ニ之アラズ^{本法}第九而
四十一条第五而四十三条第一條^其宣誓何レトナレハ判決確定后ニ於テ
セサル^可レハナリ^{本法}第四而二十五条第二項第四而二十六条^其
宣誓^而レテ立証判決又ハ中間訴訟ニ付テハ中間判決ヲ以テ宣誓
ノ立渡アリタル片^其反對証^ハ之ヲ為シ得ル場合ニ限リ訴訟進行
中ニテモ亦之ヲ提出シ得ヘシ但宣誓者カ故意又ハ過失ニ出テ偽誓

ノ罪ヲ犯シタルトテ示シ得ル場合ニ限ルナリ(本法第百四而二十一
条乃至第百四而二十三条并ニ解未定)又控訴ニ関シテハ本法第百四而九
十五条并ニ二項並ニ其註解ヲ参看スヘシ

蓋及対証拠ハ(本法第百二而五十一一条并ニ百五十二一条ノ第一解未定)其
立証方法ニ付テ更ニ制限スル所之アラズ然レ氏同一ナル宣誓(兼項
ニ付キ再ヒ宣誓ヲ為サレメントホクルトテ許サシルハ固トコト言
フ誤タス

(第百四解宣誓ノ免除)本法第百七十七条并ニ三解未定(本文第百四而二十九
条ニ於テ宣誓ノ免除ヲ宣誓ヲ為シタルト同等ナラレトシタレ氏正當
ト云フヘカラス如何ントナレハ即此ノ如クナレハ宣誓事項ノ真正
又ハ不真正ニ付テハ証拠ハ遂ニ差カラサレナリ即本文第百四而二十
八条并ニ二項ハ到底茲ニ適用シ能ハサレナリ(本法第百四而九十五并

二項并ニ免殊ニ况ヤ免除ノ取消ヲ許サシルニ於テヤ(本法第百二而六
十三并ニ免免)

然レ本文第百四而二十九条ハ之レニ全ク別異ナル本法第百四而十八条
ニ干渉ヲ及ホサス而シテ此第百四而二十九条第一項ノ例外ハ即本法
第百五而七十七条并ニ六而十一条并ニ六而二十四条并ニ六而二十六条是ナ
リトス

(第五解宣誓ノ拒絶)本法第百七十七条并ニ三解未定(本文第百四而十九条并ニ二解未定)
抑宣誓ノ拒絶ハ宣誓要求ニ対シ陳述ヲ為サシムコト(本法第百四而
十七条并ニ百四而二十条及ヒ宣誓期日ノ缺席)本文第百四而三十条ト判然
區別セサシム可ラス蓋ホ本文第百四而二十九条并ニ二項ニ於ケル宣誓拒絶
ハ即本法第百四而二十条ノ意義ニ於ケル認定カ既ニ定マリ又ハ故障
ノ申立ヲ為サシムカ為メ缺席判決確定シ(本文第百四而三十条)又ハ宣

據ヲ為サ、ル旨ヲ明言スル丁、要件ヲ必トスルナリ。○上ノ第三解ハ其冒頭ヲ除リ、外宣費拒絶^{場合}ニモ参照シテ可ナリ。

〔第六解期日缺席〕 本文第四而三十条ニ関シテハ、本法第三而十二条第一解第三而八十九條乃至第三而九十二條第五解並ニ第四而二十五条乃至第四而二十七條第六解ヲ參照シテ了解スヘシ。

第四而三十一條 (宣費ノ節限及ヒ更正ニ関スルノ条)

前主張ヲ取消シ又ハ前ニ争トナリタル事實ヲ自認スル宣費事務者ハ既ニ条件附判決ヲ以テ宣費事務ヲ負ハシメラレタル時ト虽モ更ニ節限シタル宣費ヲ為サンコトヲ申出シ得宣費文ニ載セタル瑣細ナル狀況モ亦之ヲ更正シ得。

〔第一解理由説明〕 本案ハ^宣漏生国法例^裁裁判通則第一篇第十

章第三而九条以下字漏生国草律第四而二十三條及ヒ北部獨乙聯邦

草律第六而二十七條ニ倣フヲ以テ明定シ即宣費事務者ヲシテ不當

ナル宣費事項ヲ更正セシメ得ルトト為セリ蓋字漏生国草律ニテハ

其為レ得ヘキ更正ニ制裁ヲ立テ必ス更正ハ相手人ニ有益利ノ位置

ヲ與ヘシメサル可ラスト定ム妥當ト云フヘシ。○本案ニ付キ既ヲ為

ス者アリ曰本文第四而三十一條ノ^趣條^{擴張}ヲ^趣條^{擴張}ニ宣費事務者ニ許ル

スニ其宣費ヲ為スニ方テ宣費文ヲ增添シ或ハ節減スルトヲ以テ

シ而シテ后其宣費ハ認諾シタルモノナルヤ將^否認^シタルモノナル

ヤニ付キ受訴裁判所ニ裁判セシムルヲ為レ得ル事ト然レ氏果シ

テ此ノ如ク宣費事務者ノ権利ヲ擴充スルハ則逐ニ宣費事務者ハ

恒ニ本来宣費シテ成^ル一々事實ニ非ラサル他ノ事實ニ付テ據^クタ

成績ヲ見ルニ至ルヘキナラス高ホ又其更正ハ必ス本文ニ^於テ

許ルス所、他ノ方位ニ臨リテ常ニ対手人ノ反對陳述ヲ要シ從テ新
クニ審理ヲ開キ且頻ニ新タル裁判ヲ為スノ要ヲ見ルニ至ルヘシ
須ク顧布スヘシ

〔第二解制定沿革〕各章條皆相同シ國務院委員會ニ於テ本文ノ末段
ヲ追加シ以テ幾團ヲ氷解セシメタリ乃其說明ノ比例ト為レタル所
ハ或人某事實ハ一定ノ日時ニ現在シタリトノコトヲ據フ可キニ方
リ自其日時ノ誤記セラレヤンテ見出セリ此ノ如キ片ハ其日時ノ
差異ハ之ヲ更正スルモ敢テ妨ケスト云フニ在リ(評事筆記録卷三)

〔第三解(註)〕抑本条ニ於テ豫期スル裁判、註者按節限宣誓ノ申ハ特
出ニ付キ為ス裁判リ受許裁判所ノ職權ニ屬シ受託裁判官受命裁判官、本法第四而四十
一条並ニ第三而三十一条、第三解卷三ハ之ヲ為スリ
得サルナリ然リ而レテ本条前段ノ意義ハ事件ノ位地ノ変更ヲ必要

トスル所ニシテ即一ノ新タニシテ宣誓事務者ノ対手人ニ利益スル
理由アラサル可ラサルナリ上ノ第一解卷三ハ必充立証決議、以テ確
示シタル宣誓文、本法第三而二十四条第四ヲ更ニ改定スルナリハ
元來以時ニ變更レ得ヘキ性質、命令カ故ニ受許裁判所ニ
其命令ヲ變更決行スルヲ得ヘシ〔本法第三而二十三条乃至

第三而二十九条第五解卷三特リ裁判官ノ為メ自ラ變動スヘカラサ
ル所、宣誓ニ付テリ終局判決及ヒ中間判決ニ関シテハ本条ノ切要
ナルヲ知レトシ〔本法第二而八十九卷三〕
而レテ如何シノ状況ニシテ果シテ瑣細ノモノト為スヘキ本条ノ意
義タルヤハ上ノ第二解卷三裁判所ノ見込ニ放任スルナリ而レテ宣
誓文ノ変更ノ申立ヲ許可シ若リハ棄却シ並ニ職權ヲ以テ為スヘキ
更ニ本法第二而九十条卷三ニ関シテハ本法第四而二十七条第二項

ニ依テ此裁判ニ基キ為シタル判決ニ對シ普通ノ上訴ヲ為スハキ精
神ナリトス

宣誓文変更ニ関シ有益ナル事例ハ帝国高等南軍裁判院ノ判決第
十七卷第二号ニ在リ矣オスハシ

第四百三十二条 宣誓要求及ヒ反要求ヲ取消スルニ

條件附判決ヲ以テ宣誓義務ヲ負ハシメラレタル場合ニ於テハ其判決
ノ確定シタル後ト雖モ宣誓義務者カ知リツキ宣誓義務ニ背キタルニ
因リ受ケタル判決ノ確定シタル時又ハ相手人ハ宣誓ノ要求若クハ反
對要求ヲ為シタル後始メテ其言渡ヲ知了シタルコトヲ証明スル時ハ
宣誓ノ要求並ニ反對要求ヲ取消スコトヲ得

第四百三十三条 宣誓義務者ノ死亡等並ニ取消ノ効力ニ関スルニ

宣誓義務者死亡スル時又ハ宣誓不能ト為ル時又ハ法律上代人タルコ
トヲ止ムル時原告被告両造ハ宣誓要求前ニ有セル總ヘテノ權利ヲ其立
証ニ付テ執行スルコトヲ得

宣誓義務者知リツキ宣誓義務ニ背キタルカ為メ有罪ノ言渡ヲ受ケタ
ルニ依リ宣誓ノ要求又ハ反對要求ヲ取消スル時ニモ亦前項ニ同シ
條件附判決ヲ以テ宣誓義務ヲ負ハシメタル時ハ其判決ヲ廢棄シ更ニ
取事件ニ付テ言渡ヲ為スモリトス

第一解制定沿革 起稿委員本節中三四ノ条項ヲ修正スハキ依屬ヲ
受ケ逐ニ第百四十六條現在ノ第百二十二條ヲ制限シテ宣誓ノ要求
ニ止メ却テ新タニ第百十四條甲現在ノ第百三十二條ヲ追加シ
タリシニ異議ナク採用セラレタリ是故ニ本文第百四而三十二條ノ理

由説明ヲ缺ケル本法第百四十七條第一條之旨

又本文第百三十三條ニ付テハ即各章條皆異スル所ク且異論ナク通過シタリ而シテ理由説明ニ曰

第百三十三條ハ北部獨立聯邦章條第六百二十八條ニ倣フテ定メ

ラレタル所ニシテ即此第一項及第二項ニ掲ケル場合ニ於テハ宣

禁ヲ拒絶シ居ルハ為シタリトモ認定スルナクシテ反テ原告兩

造カ宣禁要求前ニ有セル恣テノ權利ヲ其之証ニ付テ執行シ得ヘキ

ノ規定ナリ今此規定ヲ立タルカ為メ從末ノ不當ナル獨乙普通法ノ

曖昧ヲ驅除シ得タリ然リ而シテ多數ノ法制ニ於テ宣禁ヲ為

ル者カ對テ人ノ非偽又ハ重キ過失ノ為メ宣禁ヲ為スコトヲ妨ケラレ

タル時宣禁ハ之ヲ為レタルモノト看做ストル趣旨ナルデレボウルガ

國第百七十六條第ニ條ニハ右ノ趣旨ヲ故テニ事件ヲ遷延セシムル

モノト為シ又バテレ國第五百六十二條ニテハ特ニ對テ人上訴ヲ為

シテ事件ノ遷延ヲ計ル場合ニ及ホセリハ本條ニテハ字漏生法制字

漏生國中條及ニ北部獨立聯邦中條ニ拠リテ不安者ナリトシテ之ヲ

採用セザンナリ云々

〔第一條取消〕 本文第百三十二條ハ偏ニ條件付判決中間判決又ハ

終局判決ヲ以テ宣禁ヲ及ハレメムル場合ニ於テ宣禁ノ要求又ハ反

對要求ヲ取消スコトニ付テノミ規定シタルモノニシテ而シテ此判

決ヲ言渡ス以テ立証決定ヲ以テ宣禁ヲ言渡ス場合ニ於テ宣禁要求

ヲ取消スニ付テハ即本法第百四十九條第二項第百二十二條ニ

準拠スヘキナリ又宣禁要求ノ取消ニ付テハ且ク本法第百四十一

條乃至第百四十二條乃至三條ニ就テ亦亦ヘレ

宣禁ニ付テハ判決確定ヲ為シタル後本法第六百四十五條未定宣禁

ニ在リテ訴訟人ハ其宣誓期日(本法第四而三十三條)ニ之ヲ果行スルノ暇ナキハ特別ニ期日ヲ定メ相手人ヲ喚出シ必ス其請求ノ原基ヲ明ニ陳述セザル一カラス又必要ノ場合ニハ之ニ付キ証明ヲモ為レ或ハ第四而二十二條第四而三十二條ニ照シ明示ヲモ為ス可キナリ然レハ原告被告両造ハ各其主張本トシテ方法ヲ提出シ得ルモ平等ノ權アリシ所ノ主張又ハ立証方法ヲ提出シ付テハ權利ヲ同等ニ執行シ得ルモノナリ

又裁判官ハ訴訟人ノ申立ノ聲却スルコトヲモ為シ得ルハ勿論ナリ而シテ原告被告ハ此判決ニ對シ普通ノ上訴ヲ為シ得ルニシテ本法第四而三十七條第二項ニ照ス

本文第四而三十三條第三項ノ規定ハ終局判決及ヒ中間判決ノ不可變ナルコト(本法第四而七十九條其他第二而七十九條)ニ至テ乃至第四而七十九條ノ例外ニ至ル

五條第五條解糸魚而シテ何レノ裁判所カ更ニ事件ニ付キ言渡ヲ為シ得ル手ハ即言ヲ後タスレテ宣誓ノ要求ヲ行タル裁判所ナルコトヲ明瞭ナリ(本文第四而三十三條第一項)

第四而三十四條(共同訴訟人ニ關スル宣誓ノ要求又ハ反訴)
共同訴訟人總負ニ對シ合一スルニ非ラサレハ確定スルコトヲ得サル權利上關係ニ影響アリ及ホス事實ニ付テ為ス一キ宣誓ハ共同訴訟人ノ各員ニ宣誓ノ要求又ハ反訴要求ヲ為スコトヲ許ルヌ可ラサル時ニ限リ其後負ニ向テ之ヲ要求シ又ハ反訴ニ要求スルヲ要ス各場合に於テハ宣誓ノ要求又ハ反訴要求ヲ為スニ付テハ訴訟共同人總負ノ同意ノ陳述アルヲ必要トス宣誓ヲ承諾スルニ付テハ宣誓ノ要求ヲ受ケタル共同訴訟人ニ限り陳述ヲ為ス可キモノトス

共同訴訟人ノ總負又ハ二三名カ为ス一キ宣誓ヲ其一名又ハ數名拒絶
スル時又ハ拒絶シタリト看做ス一キ時又ハ共同訴訟人ノ一部カ为ス
一キ宣誓ヲ宣誓事務者總負拒絶スル時又ハ拒絶シタリト看做ス一キ
時裁判所ハ自由ノ心証ヲ以テ宣誓要成ニ依リ証拠ヲ申出タル主張ヲ
真ニナリト看認ハ一キヤリ裁判ス共同訴訟人ノ各負宣誓ヲ为サスト
陳述スル時裁判所ニ於テ宣誓ヲ重要ナラスト看做ス時ニ限り其他ノ
共同訴訟人ニ對シテ宣誓ノ命ス可ラヌ又ハ之ヲ採用ス可ラヌ

〔第一解理由説明及ヒ制定沿革〕 理由説明ニ同共同訴訟ノ場合ニ於
テハ共同訴訟人總負ニ對シ合一スルニテアラサレハ確定スルコトヲ得
サル權利上關係ニ影響ヲ为ス所ノ事實ニ付テノ宣誓ニ因レテノミ
特別ノ規則ヲ設ケルルニ必要トスヘシ〔本法第五十九条矢筈〕

本条ハ北即獨ニ聯邦軍律第六百二十九条第六百三十条ニ拠テ定メ
ラレタル所ニシテ即共同訴訟人ノ總負又ハ二三名カ为ス一キ宣誓
其一名又ハ數名カ拒絶シ又ハ共同訴訟人ノ一部カ为ス一キ宣誓ヲ
宣誓事務者總負拒絶シ又ハ之ヲ拒絶シタルモノト看做ス一キ時ニ
發生スル困難ヲ除却セシメンカ为メ本法第四百二十九条第二項
ノ立証原則ノ相高ニ宣誓拒絶ノ能力ニ付キ裁判官ノ心証上ノ自由
裁判ヲ为シ得ルノ方法ヲ定メタリ

本条ニ付テハウヅア氏カ其四季年報中ニ(敏銳)ナル拙譯ヲ奉テアルニ
モ拘ハラヌ異論ナリ採用セラレタリ〔下ノ第三解矢筈〕
〔第一解共同訴訟人〕 本条ニ指ス共同訴訟トハ即本法第五十九條ノ
第一ノ場合ヲノミテ之ニシテ他ノ場合更正ヲ得カンノ共同ナリニモ
拘ハラヌニハ及ホサレルナリ故ニ亦本法第五十八條ノ意ニ依リ
テ僅ニ共同訴訟ト做ス所ノ補助参加及ヒ加入シタル告知参加人ヲ

ニ付テハ本文ニ異ナリ

本条第二項ノ宣誓事務者ナル者ハ有効ニ宣誓ヲ要求セラレ又ハ反
對要求セラレ得ヘキ共同訴訟人ヲ云フ事ナリ

第四而三十九条 (訴訟無能力者ニ向テノ宣誓ノ要求又ハ反求)

原告ノ一方訴訟能力ヲ有セサル時宣誓ノ要求又ハ反對要求ハ該法
律上代人ニ對シテノミ之ヲ為スコトヲ許ルス但代理セラレタル一方
自己^{親カシ}訴訟ヲ為セシ時又ハ世代人自己^{親カシ}一方ナリ時世要求又ハ反
對要求ヲ承諾セサル可ラサリレ時ニ限ル

十六歳ヲ超ヘサル未成年者又ハ浪費者ハ其行為タル事實又ハ親驗シ
タル事件ナリレ事實ニ付キ宣誓ヲ要求セラレ又ハ反對ニ要求セラレ
ルコトヲ得但裁判所カ對テ人ノ申立ニ依リ場合ノ状況ニ從ヒ之ヲ許
スヘシト言渡ス時ニ限ル

第四而三十六條 (全上)

法律上代人數名アル時ハ亦第四而三十四條ノ規則ヲ適用ス宣誓カ只
代人ノ二三名又ハ一名ノミト行為又ハ親驗ニ關スル時ハ世他ノ者ハ
之ヲ為マ可ラス

第一解制定沿革 字漏生國章程第三而九十八條ニテハ本文ノ二條

ヲ合シテ一條トナレ且只本文第四而三十六條ノ前段ノミニ止マ
リ北部獨乙聯邦章程モ亦之ニ因レ且世第六而三十一條ニ於テ法律
上代人ノ各箇ノ場合ヲ明テセリ世他ノ章程ハ本條ニ等シ

亦文第四而三十九條第一項ノ全文ハ原ト

代人自己ニ一方ナリセハ之ヲ承諾スヘカリレハ

トアリタルヲ国務院專責カ現今ノ如ク修正レ以テ代人ハ代理セラ
ル、者カ預テヘキ事務ノ度ニ於テ預テヘキノ事ヲ明カニシタリ例々
ハ被告カ原告タル未成年者ニ向テ其死亡シタル父ニ果行シタル勘
定ニ付キ宣誓ヲ要求スル場合^{在リ}ノ如キ是ナリ

〔第二解理由説明〕 本按ハ凡ソ訴訟能力アル者ハ宣誓能力アリトス
ルノ主事ニホツケリ故ニ〔本法第三百五十八條第一ニ異ナリ〕原告
告トシテ為ス宣誓ノ為ニ宣誓能力ノ時限ニ付キ別ニ規定スルコトナ
キナリ又并識力薄弱又ハ并識力未熟^{ニ因}テ宣誓能力ヲ有セストノ
規則ヲモ設定セス〔但下ノ第三解冬冬必竟此等ノ規定ハ之ノ必要ト
為サセ九ナリ〕

抑本文第四百三十五條ハ訴訟能力ヲ有セサル原告又ハ被告^ノ訴訟
第五十條以下ノ規則ニ準拠シ他人^ノ訴訟ヲ代理セシムル^者法律
ニ依リて専断スル^ハ反對要求^ノ為ニ付シテ訴訟ヲ代理セシムル^ハ法律

上代人ニ對シ宣誓ノ要求又ハ反對要求ノ為スニ付キ定メラレタル
所ニシテ即殊ニ町村公会並ニ其資格ヲ以テ出訴セラルコトヲ得ハ
キ会社組合其他協會及捐助物公會及ニ積財ニ關係スヘキナリ〔本法第
十九條冬冬蓋法律上代人ハ宣誓ノ要求又ハ反對要求ニ關シテハ原
被告ノ一方ト看做ルナリ而レテ宣誓ノ要求又ハ反對要求^{ニ付テハ}
本法第四百十條以下ノ規則ハ代人ニモ適用セラレハク又宣誓事務
者トアルハ代人其人ヲ指スニテ代理セラレハク、原被告本人ヲ云フニ
非ラサル意ニ付トス〔但上ノ第一解冬冬蓋然リ而レテ本文第四百三十五
條第二項ニ於テ場合ノ格別ナル狀況ニ從ヒ未成年者又ハ浪費者ノ
為シタル宣誓ハ無論有効ト看做スト否ハ裁判所ノ相当ナル斟酌ニ
委付ス

〔第三解第四百三十五條ニ付キノ解釋〕 訴訟無能力者並ニ法律上代

人ニ関シテハ即本法第五十条並ニ其註解及ヒ第百二十七条第百二十八条ノ第百五解ヲ参看ス一ニ是レ乃是レ北部独乙聯邦草案第六百三十一條ノ先蹤ヲ追ヒ若シ協會ノ首長ナキハ其全會員ヲ法律上代人ト看認メ又若シ合議制ノ職責ヲ以テ代人ト為ス一キハ其全職責ヲ數名ノ法律上代人ト看做ス趣意ヲ取リテ蓋然者ト云フハシ本法第百三十五條ニ於テ既ニ自然ニ有効ナル以テ及ヒ精神上ノ妨礙アル場合ヲモ認容シタルニ拘泥シテ上ノ理由説明ノ意ハ治産ヲ禁セラレサル痲癩者ヲモ宣誓ヲ為スニ堪フルモノトシテ之ヲ許ルムナリト解釈ス可ラサルナリ

本文第百三十五條第一項ノ現今ノ行文上ノ第一解末直ニテハ法律上代人ニ對スル宣誓ノ要求又ハ其反對要求ヲ許ルス一(本法第百四十條第百三十三條第百四十五條並ニ宣誓ノ文面(本法第百二十

四條末直)ハ左ノ二条件ニ大ナル關係ヲ有スル意ヲ明カニシ得ヘキナリ即第一法律上代人其人^{自己ニ}付ト係ル事即代人タル者自己ノ行為及ヒ親驗ヲ真正ニ付テノ宣誓ノ条件ト成スコト(第三法律上代人

カ代理セラシムル本人ノ地位ニ立ツテ即代人其人ハ之ヲ知ラサルモ^{他人ヨリ}本人ニシテ若シ訴訟能力アルモノト看認サルハ則本人ノ^{宣誓ノ}義務ヲ負フ^{宣誓ノ}義務ト成ル一キ行為及ヒ親驗ニ付キ宣誓スルノ義務

ヲ負フ所是レナリトス(上ノ第一解末直)ハ右ノ第二ノ場合ニ於テハババテニ國法制並ニ獨乙普通法ニ於テハ如ク狀況ニ從テハ法律上代人ニ向テ真正ナル一ノ宣誓ヲ求メ得ヘカラス必竟法律上代人ハ代理セラシムル本人ニ非ラズ(本文第百四十三條ニ依リ要求者タルカ又ハ要求ヲ受クン者ニテ)本法第百二十四條第三項ヲ適用セラレハケレハナリ

又本文第四百三十五条ノ意ヲ、特ノ現職ノ法律上代人ヲ指スモノ
ニシテ既ニ退任シタル前代理人ハ本法第四百十四条ノ意ニ於ケ
ル第三者タルナリ(本法第四百十五条其他第四百三十二条第四百三
十三条ノ第四解參見)

一商社ノ代理資格ナキ社員ハ宣誓ヲ為スノ義務モ權利モ之アルナ
クシテ而シテ商社ノ解散後ニシテ清算時間中ニ方テハ亦社員ハ宣誓
ノ義務權利ヲ有セス特リ清算人ハ權利ヲ有ス(帝國高等商事裁判院
判決録第四百二十一卷第四百十号第四百二十四号參見)

〔第四百解數名ノ法律上代人〕 本文第四百三十六条ニ依レハ若シ宣誓
スル一事件カ數名ノ代人中ノ一名又ハ若干名ノ自己ノ行為又ハ親
族ニ係ルモノナルハ其他ノ法律上代人ハ宣誓義務ヲ負ハサルナ
リ此ノ如キ場合ニ於テ若シ世一名カ宣誓義務アルハ則單商ニホ

法第四百二十九条第四百三十条ヲ適用シテ可ク之ニ反シテ數名
ノ代人カ宣誓義務ヲ負フ時ハ尚ホ更ニ本法第四百三十四条ヲ適
用シ猶ホ代人ノ總負カ宣誓義務者タルモノ、如ク為スルナリ蓋
シノ如キ場合ハ即代人總負ノ為メ其自己親族ニ係リ或ハ他人ノ親
族ニ係ル事實ニ付キ宣誓スルニキ付シ生スルモノトス(上ノ第三解參
見)蓋シテ法制ヲ定メテ以テ商社又ハ組合ノ數名ノ代理人ヲシテ宣誓
ヲ為サレシムル場合ニ付キ生シ易キ難向題^(審判ノ解釋スル)ニシテハ其ノ得
タレナリ)

第四百三十七条 (裁判官ノ命ズル宣誓ニ関スルノ條)
審理ノ結果及ヒ株証ヲ為シタル場合ノ其結果カ証明スル一事實ノ真
正又ハ不真正ナルコトニ付キ裁判所ノ心証ヲ確カスルニ十分ナラザ

ル時裁判所ハ争トナリタル事實ニ付テ原告ノ一方ニ宣誓ヲ取ハレ
ムルコトヲ得

第四百三十八条 (全上)

裁判官ノ命スル宣誓ハ共同訴訟人ノ總算又ハ法律上代人ノ物質又ハ
其二三名又ハ一名ニ之ヲ取ハレムルコトヲ得

第四百三十九条 (全上)

第四百二十二条乃至第四百三十三条及ヒ第四百三十五条ノ規則ハ裁
判官ノ命スル宣誓ニモ之ヲ適用ス

宣誓義務者知リツル宣誓義務ニ背キタルニ因リ言渡サレタル判決確
定レタル場合に於テ裁判官ノ命スル宣誓ヲ取フ以前相手人既ニ其言

渡ヲ知リタル時ト雖モ相手人ハ其宣誓ヲ取消セントノ申立ヲ為ス
ノ權アリ

裁判官ノ命スル宣誓ハ条件附判決ヲ以テ之ヲ取ハレムルモノトス

〔第一鮮制定沿革〕 各草案皆其意ヲ同フス獨リ北部獨リ聯邦草案第
六百三十六条ハ本法実施法第十六条第三ニ載スル所ノ原告宣誓ニ
付テノ規則ヲ包含ス而レテ本文ニ付テハ国裁院委員会ニ於テ劇レ
キ論議アリテ即此裁判官ノ命スル宣誓ハ原告両造ヨリ各申出テ
ル採証ヲ餘蘊ナク結了レタル以上初メテ之ヲ許ル且此裁判官ノ
命スル宣誓ニ添ヘテ一種証言宣誓権ノ体裁ニテ原告本人審理ヲ
施行セルト争フタル然レモ到底修正セラルハニ至ラスレテ初決ノ
為レタリ

〔第二鮮理由説明〕 蓋獨リ普通法ニ依レハ元來此裁判官ノ命スル宣

禁ハ不完全ナシ証拠ヲ補充シ若シハ排斥スルヲ為メニ用フル所ニシ
 テ即之ヲ命スルニハ必ス証拠調ヲ果行スルノ要件ヲ必トスルナリ
 此類ノ事タルヤ北計独乙聯邦章程第六百三十三条ヲ除クノ外新定ノ
 各独乙訴訟法制ノ採テ以テ基ツケル所ナリト虽モ又裁判官ノ証拠
 ノ自由判断ナシ原則ヲ採用シタルニ因テ遂ニ甚ク薄弱ノモリタル
 ニ陥リタリ必克同リ此類ノ事ヲ裁テ之ヲ断行セシト欲スレハ則右ノ
 原則アルカ^ル為メニ裁判官ヲシテ豫メ採証手續ヲ行フコトヲ夙トシ
 其為シタル審理ニ基ツキテ宣讀ヲ命スルヲ得ル職權ヲ有セシメ^加
 若シ審理ノ結果又ハ採証ヲ為シタル時ハ其結果カ証明スヘキ事實
 ノ眞正又ハ不眞正ナルコトニ付キ裁判所ノ心証ヲ固フスルニ不克
 分ナシ片何レノ原告ノ一方ニ^向何レノ争トナリタル事實ニ付キ宣
 讀ヲ命スヘキヤヲ定ムルコトヲ裁判官ノ見込ニ放任セサル一カラサ
 ルヘシ乃北計獨乙聯邦中條第六百三十三条ハ右ノ趣旨ヲ明示セリ
 又本條ニテハ此等四百三十七条ニ此規定ヲ含蓄セシメタリ
 蓋裁判官ノ命スル宣讀ハ其目的ト為ス所ニ從ハ即裁判官カ争ト
 ナリタル事實ノ眞正又ハ不眞正ニ付キ尚ホ^不確カナルニ^不充
 分ナル心証ヲ原告ノ一方ノ宣讀上ノ確言ニ依リ能ク補足シ得ハ
 シト認ムル原告ノ一方ニ及ハレハキナリ而シテ其及ハシムヘキ
 原告ハ宣讀能力之アルト之ナキトハ敢テ之ヲ問カス若シ果シテ
 宣讀能力ノ如何ニ從ヒ其^無能力者^ニ裁判官ノ^無命スル宣讀ヲ及ハ
 シメ得ストレテ之ヲ除外スルハ本案ノ主文ニ於テ相当ラザル所ナ
 ルナリ
 既ニ採証手續ヲ決行シタル后ハ裁判官ハ其命スル宣讀ヲ及ハレハ
 ルニ方テ敢テ立証決済中ニ掲載シアル事實ニ拘束セラレノ制裁ナ

キナノ蓋裁判官ハ立掃ニ重要ナシ事實ノ真否又ハ不真正ナルコト
ニ付キ心証ヲ鞏固ナラシムルニ必要ト認ムルハ立証事項ニハ固
掃ニ過キサル重要ノ事實ニ付キ宣明上確定セシムルヲ得ハシ
第三解裁判官ノ命スル宣明ノ必要件 裁判官必ス完全ナル心証ヲ
採ラサル可ラサル限リ本法第二五九条第二項第三而八十条夫
意或ハ一モ心証ヲ必要ト為サシ限リハ此裁判官ノ命スル宣明ハ
之ヲ用フヘカラス此他ノ場合ニ於テハ裁判官ハ更ニ制裁ヲ被ケル
トナレ上ノ第一解第二解本意然レモ裁判官之ヲ命スルニ方テハ必
ス源ク其心証ノ理由ニ付キ明示セサルヘカラスレテ即裁判官ノ斟
酌ノ為メニスルモノナリ決シテ主権尊嚴ヲ以テ漫ニ命スヘキニ非
ラス本法第二五九条第一項並ニ世第四解本意又裁判官カ厚被
告ノ总体ノ心証ヲ採ラスル以前ニ於テハ命スル宣明ヲ及ハレメシ
トナス場合ニ在リモ亦然ルナリ上ノ第一解本意
估計宣明ニ付テハ本法第二而六十条ノ本意ハレ又本法第二而十
一条第二而二十四条第二而二十六条ハ此裁判官ノ命スル宣明ヲ
採ラス而レテ婚姻事件ニ付テハ本法第五而七十七条第五而七十八
条第四項心証許諾ニ関レテハ第五而五十八条ノ本意ハレ
第四解裁判官ノ命スル宣明ト仲裁々判宣明トノ肉任 理由説明
同裁判官ノ命スル宣明ニ付レテハ宣明ノ要求ナルモノハ敢テ成立
テ得ス世要求セラレタル宣明ハ承諾セラレ又ハ反対ニ要求セラレ
ハ氏是等ニハ裁判官更ニ妨碍ヲ被ケルトナレ仍然第四而三十七条
ニ依リ付與セラレタル職權ヲ実行シ得ルナリ云々
右ノ説明ヲアテ氏ハ大ニ攻駁ヲ為セリ然レ著者ハ氏ノ論ヲ妥當ト
為サス乃若シ宣明要求者又ハ攻撃者アリ他ノ立証方法ヲ申出タレ

場分付

時ハ則本法第四十九條第二項ヲ準テ之ヲ解理シ得ヘシ必免該条ハ是等ノ点ヲ顧慮レテ設定セラレタムモノナリ又仲裁ノ利害カ唯一ノ立証方法タル場合ニ於テモ亦裁判官ハ本法第四十三七条ニ依リ原告兩造ノ陳供ヨリ二三ノ証拠ヲ採用シ而シテ仲裁ノ利害ヲ辨ケテ原告ノ一方ニ此命ハル宣誓ヲ命ジレムトモ為シ得ヘシハ勿論ナリ

第五條宣誓事務者 本文第四十三十九条中ニ本法第四十四條ヲ援引シテラスト箇モ必免本文第四十七條ニ依リ裁判官ノ命スル宣誓ハ偏ニ原告ニ命ジレシ之ヲ取ハレ得ルヲ以テノ故ニ亦此第四十四條ヲ適用スヘキナリ

第六條宣誓式文 理由説明ニ曰裁判官ノ命スル宣誓ニ付テハ本法第四十條ノ制限ヲ加ヘス乃裁判官ニレテ事實ノ真正又ハ不真正ナルトニ付テノ心証ヲ獲取スルカ为メ原告又ハ被告ノ信用スルヲ知ラセサルト又ハ信用セサルトヲ知ルヲ以テ重要ト為ス片ハ其一方ヲレテ心証宣誓ノ体裁ニテ宣誓ヲ為サレメントニ渡スハ因トマ

リ裁判官ニ委任シテアノ所ナリ本法第四十二條ヲ本文第四十三十九條第一項ニ比照未着ムヘシ必免知ラセサルト又ハ信用スルトノ宣誓ニ付テノ理由ハ單ニ宣誓ノ要成ニ付テノニ適用セラレハキ

モノトス云々
蓋右ノ説明ハ即本文第四十三十九條ニ引用シタル条項ニ制限アル所ヲ了解セルカニ足ルヘシ

第七條共同訴訟人及ビ教名ノ法律上代人 理由説明ニ曰本文第四十三十八條ニ定ムル所ノ裁判官カ一名又ハ二三名ノ共同訴訟人ノ為シタル宣誓ニ因テ得タル証拠ノ理由ヲ其他ノ共同訴訟人ニ對シ

テモ亦有効ニ用シカ为メ共同訴訟人ノ一名又ハ二三名又ハ他質ニ
此止リ得ザルノ宣誓ヲ負ハレメ得ヘキ規定ハ即上条ニ説明スル此
裁判官ノ命スル宣誓ナルモノ、本如ク成案ナリ云々

抑立法上ノ地位ニ在リテ觀察スル所ハ漸ク趨園ヲ免カレスト雖モ必
スヤ本文第四而三十九條九ヘアノ共同訴訟ノ場合ニ適用セザルヘ
カフサレハレ何レトナレハ世行文ハ全ク沈黙トシ且本法第四百三
十四條ハ之ヲ適用スヘカラスト云フヲ以テナリ

本文第四百三十九條ニ於テハ、^即此条文ニ引奉セシ本法第四百三十九
條ニ別ニ制限ソ为レアラザン以上ハ數名ノ法律上代人ヲ以テ共同
訴訟人ト全ク同カラシムルナリ然レ本法第四百三十六條ヲ引奉セ
ザル所ニ依レハ又裁判官ノ命スル宣誓ハ他人ノ为レタム行為又ハ
親族ニ付キ確言セシムヘキ代理人ニモ亦負ハレメ得ル意ナリ

第八條裁判官ノ命スル宣誓ト仲裁人ノ宣誓トノ差異上ノ第六條第
七條^{七條}及第九條^{九條}蓋裁判官ノ命スル宣誓ヲ兼括スルテ又ハ之ヲ兼括スル
テヲ勸告スルテノ如キハ之ヲ要トセス又及対ニ要求スルテモ之ヲ

許ルサレハナリ乃本法第四百十六條第四百十七條及第四百三
十九條ニ引奉セシ^故本法第四百二十二條第四百二十三條ヲ引奉
スルハ其目的之アムヘカラス然レ而シテ本文第四百三十九條第三
項ニ付テハ即本法第四百二十五條第一項並ニ立法決議ニ關スル所
四而二十六條ヲ適用スヘカフザルカ如シ又本法第四百三十二條ハ
本文第四百三十九條第二項ノ为メ特^格規定タルニ至レリ

第九條^{第九條}及第十條^{第十條}本法第四百二十一條乃至第四百二十三條ノ第二
項^{第二項}及第十條^{第十條}本法第四百二十一條ノ規定ニ依リ^故其ノ偽誓ハ即
本法第四百三十二條ノ意^意及於ケル判決^{判決}更^更理由ヲ为スニ過キ

住居、於て受訴裁判所、裁判官又ハ世他ノ裁判所ニ面シテ之ヲ為ス
モノトス

第一解理由說明 本法ニ於テハ之ヲ各處ニ屢掲載セルノ煩ヲ避ケ
テ北部篇ニ聯邦章程第六而三十七条以下ノ先蹤ニ倣ヒ民事訴訟ニ
於ケル宣誓ノ採用ニ付テノ手續ヲ特ニ此第十一節ニ經羅スルテニ
定メタリ蓋此節ノ規定ハ原告間ニ於テ為ル要求ノ宣誓並ニ反封
ニ要求スル宣誓及ビ裁判官ノ命ニ宣誓認認提出ノ宣誓原告宣誓
〔本法第七百一十一條第七而六十九條第七百八十条以下各條其他明示
ノ方法〔本法第二百六十六條各條及ビ第三章証人及ビ鑑定人ノ須
ノ為ス一キ宣誓等ニ付テ宣用セラル一々所トス

二三人訴訟法例一ハカレゲンボルク國第九十九條バデレ國第五而七
十二條第四而五十一條ニ於テ定ムル所ノ輕微ナル物件ニ付テノ争
訟ニ於テハ宣誓ニ代ヘテ確言ヲ准據握手ノ誓ト為スヲ許ス趣旨ハ
果シテ妥當ナル一キ手續甚々顧ミ一々所ナリ

本文第四而四十條ハ各聯邦ニ於テ許ルレテハ代理人ヲシテ宣誓ヲ
為サレ得ルノ規定ヲ更正シテハ〔字滿生國裁判通則第一篇第
十條第三而十四條バデレ國第五而六十六條第五而六十七條ハレノ
アル國第二而八十四條〕並宣誓ナルモノハ本來ノ性質ニ於テ斷シテ
代理ヲ許ハスヘカラサル所トス

而レテ此第四而四十條ノ趣旨ハ新定ノ立法主クニ適合シアルノミ
ナラス又本法第四而三十九條第一項ニ於テモ既ニ常ク就述シタル
所ノ如ク法律上代人ハ宣誓ノ務アルモノト名做シテ敢テ之ヲ拋棄
セサルナリ〔本法第四而三十三條第四而三十五條並ニ第四而三十二
條第四而三十三條ノ第四解各條

又本文第四百四十一条ヲ以テ定ムル所ノ受命裁判官又ハ受託裁判官ニ面シテ為ス宣明ニ付テハ規則ハ即本法第三百二十条并四
第三第四ニ適合ス而シテ千八百六十七年頒布ノ帝国領事館ニ関ス
ル法令^{第三十條ニ依リテ}外國ニ在リハ帝國領事ニ面シテ宣明ヲ實行シ得ル
主ツトス

又此項ノ規則ニ付テハ即裁判所^{裁判}ノ宣明法并五章ニ付ス
凡理由說明^{中ニ}解釋^レセ

「第三解勸告^{勸告}」 本文第四百四十一条ノ第二項ハ特ノ政府起
ノ第二回中梅ニ之アノミナリ^{ニ付}其他^{ニ付}章程ハ各中梅皆同シ而シテ
本文第四百四十条ハ国務院委員会ニ付テ異議^{異議}通過シタリ又本文并
四百四十一条第一項ニ付テハ之ヲ據成シテ他ノ場合ニマテ及ホレ
及ヒ其第二項ニ付テハ^又本法第三百二十二条ノ規則ヲ取消^アントノ

勸告アリシモ遂ニ採用セ^レザリヤ

「第三解勸告^{勸告}」 宣明ハ立証^{立証}後又ハ中間判決又ハ終
局判決ヲ以テ負ハシメラル、ニ拘ハラス到底採行ノ用ニ供スルニ
外ナラス^ノ乃裁判所ノ公然ノ儀式ヲ要シ本法第三百二十六条并
一解冬^冬及^及今宣明^今ヲ行フノミ^ノ為メニモセヨ^モ轉推^{轉推}ヲ以テ宣明期
日ヲ指定ス^トト^トハ^ハ本法第三百二十二条第二項ノ第一解冬^冬而レテ
期日ニ缺席^{缺席}シタル場合ニ付テハ本法第四百三十五条^ノ及^及其^其解釋^{解釋}
宣明^{宣明}ヲ執行ス^ルハ^ハ場所^{場所}ニ関シテハ^ハ本法第九十六條^ノ及^及其^其解釋^{解釋}
未^未知^知ス^ルト

「第四解受託裁判官」 内閣代理^{代理}官^官ハ^ハ本文第四百四十一条^ノ第一項^ノ行
文^ノハ^ハ本法第三百二十条^并三十七条^并四十条^ニ差異^スル^ト
ニ付テ説明^シテ曰^ク此^レ以テ^テ差異^ノ見^ル所^ハ即裁判所^ノ編制法^并百五十

第四百四十三条 宣誓ノ程式ニ関スル事

宣誓ハ左ノ詞ヲ以テ始マシ

予ハ不測ノ勢カト及ヒ無限ノ冥智トヲ具有スル天帝ニ向テ誓フ
又左ノ語ヲ以テ之ヲ終ハシ

此真實タルヤ天帝ノ予ヲ保護スルカ如ク

〔第一解制定沿革〕 字漏生国軍律第四百九条ニハ左ノ第二項アリ曰
宣誓者ハ已レノ信崇スル宗教ニ適^当スル他ノ詞ヲ以テ古ノ誓詞
ヲ鞏固ナラシムルコトヲ許ス

此他ノ各中條ハ皆同シ^也シニ本文第四百四十二条ニ付テハ宣誓者
ニ示諭スル方法ヲ更ニ詳細ニ規定セントノ動議アリシニ遂ニ採
用セラレサレ又本文第四百四十三条ノ誓詞ヲ簡單ニ掲載セント

ノ動議ニ章布セラレタル(中略)上巻九例巻尾

〔第二解示諭〕 理由説明ニ曰本文第四百四十二条ノ規則ヲ以テ宣誓
ノ示諭ヲ為ス程式ヲ印行シテオクテ廢止シテ漏ニ宣誓者事務ノ身
分ニ適応シタル諭示ヲ事件毎ニ裁判官カ為スハキヲ趣キニ定メ
ルナリ云々又国務院委員ハ公正解然本法第五十二条第二解巻尾ニ抑
此示諭ハ官ニ宣誓ノ普通ノ効用ヲ示スノミニ止ラス尚ホ該キ事件
ニ付テ宣誓^法ノハキ^ニ宣誓^ノ効用ヲモ示スヘシトノ趣旨ヲ述フル
ヲ必要ト为シタリ蓋此解狀ニ付テハ敢テ異論ヲ为シ難キナリ
裁判官ハ宣誓事務者ニ向テ宣誓^法事務者カ本法第四百二十四又五第
二項第三項ノ場合ニ付テハ已ニ充分ナル探訪ヲ為シタルヤ否ヲ問
フ可キナリ(本法第四百二十四条第一解巻尾)

各縣郡法ニ行ハシタル傳教師ヲ以テ宣誓ヲ為スノ準備ヲ行ハシム

ル規定ハ本法第四百四十二条及ヒ本法實施法第十四条ニ拠テ自ラ
廢止ニ屬セリ

第三輯宣誓式文（舊法）第六十二条參照 理由說明ニ曰本文第四百

四十三条ノ宣誓式文ハ即唯一天神奉告ヲ以テ宗教ノ原基ト為ス後

一テノ宗教者流ニ適者ニ所ニテ即猶太教信者ニモ應用ス一キナ

リ云々又曰各宗派ニ從テ其流旨ニ從テ式文ヲ以テスルハ到底不用

トス又本文第四百四十三条（舊法）華國ナラシムル為メ他ノ言詞ヲ添加

セシムルハ既ニ北都獨ニ聯邦中樞ニ於テ不（舊法）ト為シタシムル如ク

實ニ不應用ト為ス云々

是ニ由リ且字漏生國中樞第四百五十二条ノ項ヲ採用セサシムル由リ

本文第四百四十三条ノ式文ハ本法第四百四十六条ニ依テ取消ソ為

スノ限ニ非ラサル場合ニ在リハ必ス變更ス一カテサル式文ヲ確定

シタルモノト云フハ本法第三百五十九条乃至第三百六十三条ノ

第四輯天皇憲章報告書ニ依テ宣誓ニ得ス若クハ之ヲ欲セサ

ル者アレハ則世者ハ宣誓ヲ拒絶スルモノト看做ス一キナリ本法第

四百三十一条參照

抑誓ハ必ス獨ニ諾リ以テ之ヲ為ス一キナリ然レモ獨ニ決メ熟セサ

ル輩ハ其能ク解レ得ル國法ヲ以テ誓フテ得ルナリ裁判所編制法

第四百八十六条參照

第四百四十四条 宣誓ノ行フニ付テノ宣

宣誓ハ誓文ヲ掲シテ誓式ヲ尾誦シ又ハ朗誦シテ之ヲ為スモノトス

又宣誓者ハ誓ヲ為ス時右手ヲ奉ク可シ

誓文ノ範圍大ナル時ハ誓文中ノ誓文ヲ讀誦ナセ及ヒ之ニ付キ示諭ス

「第二解宣誓ヲ行フノ儀式」古手ヲ奉クル式ハ即本法中ニ於テ規定スル唯一ノ儀式ナリ乃允ソ儀式ハ一切之ヲ廢シテ止ラサルノ趣ニナルカ如シ而シテ右ノ如キ辭執ノ或ハ統發セントテ懼レテ聯邦政府ヨリ此本文ノ一段ヲ削除セントノ意見ヲ提出シタリキ必竟該場ニ於テ種々ノ意見ヲ以テ論議アリタルニモ拘ハラヌ彼ノ古^末林^其特ニ明定シアルモノハ他ノ場合ニ在テハ取除ケトカシモノトストアル格言ヲ以テ此一段ハ公正辭執ノ資料タルニ至レリ^付宣誓筆記^録未^定迄

蓋訓諭法ナル古手ヲ奉リ可シト明記シテ以テ能ク其古手ヲ奉クルト^下儀ハ敢テ宣誓ヲ為スニ因係リ及エニサルノ意^キ示サレト欲シタルナリ「^宣誓筆記録及ヒ上ノ第一解未^定迄又宣誓者ハ宣誓式トシテ他ノ確言ノ詞ヲ用フルヲ許サレサルト同シク本法第四而四十二條

第四而四十三條ノ第三解未^定迄亦他ノ儀式例ハ猶太教徒ニ於テ故^ラニ帽ヲ戴キ^テ或ハ膝ヲ屈スルヲ奉リ用フルヲ許ルヤス又若シ宣誓者古手ヲ具有セス若クハ其形体上右手ヲ奉ル^ト其^ハサレ者ナレハ則此儀式ヲ為スヲ要セサルナリ

「第三解宣誓文」亦法第三而五十六條第一項ニ依レハ各個ノ証人ハ必ス別々ニ宣誓セサル可ラサルナリ是故ニ証人數名アル中ハ其宣誓文ハ本法第三而五十七條及ヒ第四而四十三條未^定迄^ハ短^カキニ非ラス又甚ッ長シトモ云ハ雅キハ即本文第四而四十四條第二項ニ適^ス書セサル場合ニ方テ頗ル煩雜ヲ致スヘキナリ是カ為メ之ヲ^テ省略スルノ方法ニ付キ勅諭アリタリシモ到底各証人ハ必ス^テ宣誓文ノ全体ソ^レ尾^ヲ補セザン可ラサル^トニ定メテ遂ニ勅諭ハ^テ重^ク布セラタリ

宣誓ノ国歌ニ付リハ本法第四而四十二條第四而四十三條ノ第三解

コキノ因難ナルニ至ル^危候アル時証拠保全ノ為之ヲ為スコトヲ得

第四百四十八条 (管轄ニ関スル条)

其申請ハ訴訟ノ繫属ニ裁判断ニ之ヲ提出ス可キモノトモ其申請

ハ裁判所管轄ニ口述シテ之ヲ^{附寄}記録ニ登記セシムルコトヲ得

急^迫ナル場合ニ於テハ裁判所受ク一キ者ノ滞在シ又ハ^{通知}セラルハ

キ物件ノ現在スル地ヲ管轄スル區裁判所ニモ亦其申請ヲ提出スルコ

トヲ得

訴訟ノ未タ繫属トナラサル時ハ前項ニ記載セル區裁判所ニ其申請

ヲ提出スルヲ要ス

(第一解制定沿革及ヒ理由説明) 各章條皆因趣キナリ而シテ北部独

乙縣郡中條ハ他ノ章條ニテ解釈ニ係リアルモノヲ明指シタル所ナ

レ○本文第四百四十七条ニ付テハ国務院委員會ニ於テ其行文ヲ脩

正シタルハ他管轄ヲ定ムルニ付テ動議アリシモ之ヲ採用セズ

理由説明ニテハ即本節ニ因シテハ獨乙普通法及ヒ各獨乙法制ニ異

ナラサルヲシテ^而且レテ本條ニ証拠保全ノ為テ訴訟ヲ起スル前

ナルト^後起スルト^ト向ハス^テ筆^テ手續ヲ為スヲ許ンスル^ト趣キナリ

庄ハ且日永年ノ紀念ノ為メノ証拠ニ付キ必要トスル^ハ即檢^査証

人証拠及ヒ鑑定人ノ鑑定ノ外ナラス而シテ^ハ証^明ニ付テハ本法第ニ

百三十一条ノ規定ヲ置テ充分ニ注意ヲ為シタル^ト又宣誓ニ依レン証

拠ニハ^別別^ニ説明^ヲ要スル^ト為メニスル^ハ証拠ヲ用フ^ハナラサル^トハ別ニ

并テ後ヲスレテ明ナシヘシム

而シテ^抑此下統ハ^一一般ノ通則ニ拠テ之ヲ規定シタル^ト本法第四百五

十三至五十五而シテ其通則ニ異ナル所^ハ訴訟^ニ關係ナリ^之ヲ為シ得

一キ特別規定ニ據テ亦見ルヘシ

第二解解題 本文第四百四十八条第三項ニ依レハ訴訟ヲ起ス以前ニテモ申請ヲ許ルモノ云々ヲ示シ又同條第一項ノ第二段ニテハ既ニ訴訟圖保トナリタル代言人訴訟ニ於テハ申請ヲ為ス片ハ彼ノ必ス代言人ヲ以テスルノ要ナキト示シタルナリ（本法第七十四條第一項及第二項參照）

商法ニ於テハ眞証拠ノ確定ニ付キ之ヲ許ルレシ又ハ之ヲ限定シテハ限リハ即申立人ハ証拠ノ紛失又ハ立証ノ使用シ難キニ至ル事故ヲ豫示スルヲ要セサントシ（本法實地法第十三條第四項參照但決案ニハ海上法ヲ包含シテラス）

其申請スル証拠ハ如何ナル事由ノモノタルヤニ付テハ敢テ之ヲ認ハス後ノ裁判官ハ其立証方法ノ重要ナルト否ヲ審査スルノ職權ヲ有スルヲナシ是ニ於テ上ノ第一解ニ於テ本法第二而三十一條ヲ引用シアル所ノモノナルニ拘ハラズ証言ノ眞正ニ付テハ証人証拠モ亦之ヲ為立テ得ヘナリ之ニ反シ唇面ノ對照（本法第四百六條參照）至テハ蓋本文第四百四十七條以下ノ要目的ヲ達スルニ供用シ難カルヘキノコト

証人証拠等ノ立証ハ特ニ証言ノ確定スル為メニノミ用ヘ得ル状態ト云ヲ狀況ハ自ラ本文第四百四十七條ト云々ニ於テ充分ナル理由ナクテ得スヘシ（本法第二百六十六條第三解及第四百五十五條參照）將ニ周航セルトスル船舶航艇又ハ水夫ヲ訊問スル如キハ即立証ノ使用困難又ハ紛失ノ危険ノ原因ト看做スヘキナリ

第四百四十九條 申請ノ趣旨ニ関スル事

申請ニハ左ノ件々ヲ掲クルヲ要トス

第一 対手人ノ氏名

第二 標記ヲ為サレル可ラサル事実

第三 立証方法若シ証人又ハ鑑定人ヲ要スル時ハ其氏名

第四 立証方法ヲ紛失シ又ハ之ヲ使用シ難キニ至ルノ懼アルコト
ヲ辨明スヘキ理由此理由ハ之ヲ明示ス可キモノトス

第四百五十條 (例外ノ途)

第四百四十七條ノ要件ナキ時ト雖モ申請シタル標記ハ対手人ノ承諾ニ依テ之ヲ命スルコトヲ得

第四百五十一條 (裁判ニ関スルノ途)

此申請ニ付テノ裁判ハ豫メ口頭審理ヲ為スコトナクシテ之ヲ為スコトヲ得
申請ヲ許可スル決定ニハ証拠ヲ採テ可キ事実及ヒ立証方法若シ証人又ハ鑑定人ヲ^審認スルハキ時ハ其氏名ヲ明記ス可キモノトス此決定ニ付シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

(第一解制定法) 本文第四百四十九條第四百五十一條ハ他ノ各中
標記ニ関シ第四百四十九條第四百五十一條ニ付テハ国務院委員ハ本法第四百四
十七條ノ行文ニ同シカラシムル為メ修正ヲ為シタリ而レテ六十年
ノ齡ヲ以テ紛失ノ懼タル得ル一キ修正標記提出アリシト推定セラ
レタリ本文第四百五十一條ハ全ク原標記ニ決定セリ又本文第四百五
十條ハ訴訟ニ関係スル原被告両邊ニ亘下ノ第三解決定裁判断ノ見
込ニ依ルトハ雖モ又相當ナル權利ヲ其ハチ為メニ規定セラレタル

証ノ趣ヲト全ク差異シテリキ即當時ノ判決ノ意不ク保存セサルニ至リ又謂フ所ノ公正解然本法律第五十一条二解本意ニ於テモ之ヲ等ケアラサルナリ本法律第四十七條第四十八條第一解第二項

本意

乃本文第四而五十一條ハ既ニ起シタル訴訟並ニ後日起スルハ訴訟ノ為メ本法律第四十七條ニ特示シタル要件即第四而四十九條第四ノ規則ヲ打消スモト云フハ此等第四而五十一條ハ第四而四十九

全ニ掲ゲタルコト他ノ立証方法ヲ用フルヲ得サルナリ又本法律第四而四十七條ニテハ採証ノ裁判所ノ斟酌ニ委任セリ
〔第四解裁判所第四而五十一條〕 裁判官ハ一ハ申請ノ程式上ノ審査ヲ為シ一ハ自己ノ見込ヲ断定スルハ上ノ第二解第三解及本法律第四而四十七條第四十八條第二解本意而シテ豫メ口頭審理ヲ

為サスルヲ裁判し得ルナリ然レ而シテ申請ヲ却下スルノハ渡ニ對シテハ申請者ハ抗告ヲ為シ得本法律第五而三十條本意之ヲ辭ルルノ文渡ニ對シテハ即此第四而五十一條ニ準拠シテ不服ヲ申立ルコトヲ得ス又對平人ハ本法律第四而五十二條ト第三而七十一條トニ照依シ指名シタル鑑定人ヲ規避スルコトヲ得檢而シテ採証ノ為メ裁判官ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ命スルコトヲ得ルナリ本法律第三而三十六條第四而五十二條本意

第四而五十二條 〔採証ニ関スルノ意〕
採証者ハ場合ノ状況ニ依リ為スコトヲ得ヘキ時ニ限り申請者ハ本及ヒ採証者ヲ選定シテ立証ノ為メ指定シタル如日ニ對平人ヲ指名ノ時ニ於テ喚出シ申立ル如日ニ於テ其權利ヲ執行スルコトヲ得セ

シムルノ義務アリ

此規則ヲ遵守セサルモ^立証ヲ為スノ妨ケトナラス

第四百五十三条 (全上)

立証ハ一般ニ其立証方法ヲ採用スルニ付キ現行スル規定ニ從ヒ之ヲ
為スモノトス

立証ニ付キ^{調音}ノ^類其立証ヲ命シタル裁判所ニ保存スルモノト
ス

第四百五十四条 (全上)

原被告両造ハ訴訟ニ於テ証拠審問所ノ使用スル権利ヲ有ス

対手人立証ヲ為セン如クニ出廷セサリシ場合ニ於テ立証者ハ対手

人ヲ相者ノ時期ニ於テ^{期日}喚出セシ時又ハ自己ノ過失ナクシテ喚

出ヲ為サ、リシモノトシテ明示シ又ハ相者ノ時期ニ於テ喚出ヲナサ、リ

シモ其過失ニ非ラサルコトヲ明示スル時ニ限り証拠審問所ヲ使用ス

ルノ権利アリ

第一解制定置 左ニ述フル点ノ外ハ各々皆同シ乃チ漏生国中

梅第百十四條及ニ北洋獨乙縣即中梅第百五十四條ニ付ハ其主

張トスル所ニ依テ立証抗弁ヲ許ルシ又此縣即中梅第百五十六條第

一項ニハ^{調音}標証ニ付テ完全ナル^{調音}標証ヲ^設置スルハ規定ヲ^設置ス又其

第百五十七條ニテ受訴裁判所ハ已ニ^標シタル証拠ヲ再度立証セ

シメ又ハ之ヲ補充スルコトヲ得ルト定メ其第百五十八條ノ以テ費

用^{違還}請求^{ハ之ヲ許ス}先^先ツ其申請者^{ラシテ}ニ費用ヲ負担セ

シメ蓋テ^テニ定メアリ

ノ編制亦法第四十五條第三項第四十三條第四十九
條第四而六十九條並ニ第四而六十八條乃至第四而七十條ノ第三解
矢^取第一^條ニ果^然トナシ^テモ^ノヲ除キテ地方裁判所ノ審理手續ニ付テハ
規則ヲ適用スルモノトス第一卷九例參照

前項(二)ニテ^果トシ^テ特^別ハ^果トシ^テ左ノ規定ニ據若ク即係裁判所ノ手
続ニ於テハ代理人ヲ以テ代理セシムルノ要ナキ^{コト}亦法第七十四條
第七十五條矢^取口頭審理ノ準備ノ為メ層面交換ヲ為スル義務ナキ
^{コト}亦法第二十條矢^取並ニ係裁判所ノ統^一ニ於テハ送達ハ受取裁判
所ノ裁判所書記ノ媒介ヲ以テ之ヲ為シ得^ル^{コト}亦法第五十二條第
百七十九條矢^取並ニ是ナリ云々

高等裁判所ニ関スル規則ヲ削除シヤムノ外ハ各中條皆本文ニ同
而シテ國會議事員會ニ於テ異議ナク採用セラレタリ

第二解ニ起^ル 係裁判所ハ裁判所編制法第二十二條ニ依リハ即單獨
裁判官制ナリ是ニ於テ本條ニ於テ裁判長又ハ裁判所ノ職權トシテ
明定スル所ノ意ハ自ラ之ニモ應^テ用^セラ^ル一^ク即按^テ當^テ憲裁判所裁
判官ハ此^ノ二個ノ裁^官ノ一身ニ兼任スル者ナリ例ハ亦法第三而六
十一條第三項第三而六十二條第三項ヲ參照セヨ而シテ本條ニテ係
裁判所ノ審理手續ヲ明定シタム所ニ就テ見ルニ稍其意ハ明解シ
易カラサルコトアルハ是ヲ俟タス^{コト}亦法第九十一條乃至第九十三
條乃至第九十八條第二而八十五條並ニ有^テ數^條ノ解^釋參^照亦^法第九十條
裁判所ニ代理人ヲ用フルノ要ナシト雖モ之ヲ用フルモ亦妨ケザル
ナリ而シテ之ヲ用フルカ否メ生シタム費用ハ^路費^ヲ除キ^テ對^テ手^人ニ
向テ進^償ヲ^求メ^得ハ^ヤモ^ト為^スナリ^{コト}亦法第八十七條第二項並ニ
其^ノ第三解第五解參^照

區裁判所ノ審理記録ニ関シテハ本法第四十五條第四十六條第一解第六解第七解第四十七條第七十條ヲ參照スヘシ
區裁判所ハ他ノ裁判所ノ嘱托ニ依リテ之ヲ処理スヘキノ責務ヲ有ス裁判所編制法第四十八條以下參照

第四百五十七條 (起訴ニ関スル條)

訴訟ハ裁判所ニ唇面ヲ以テ之ヲ提出シ又ハ裁判所唇記ニ口述シ調音ニ記載セシメテ之ヲ為スコトヲ得

第四百五十八條 (全上)

口頭審理ノ期日ヲ指定シタル後裁判所唇記ハ原告ノ親ヲ訴訟ノ送達ヲ為サント欲スルコトヲ陳述セサル時ニ限り其送達ヲ担当ス可シ

第四百五十九條 (全上)

答弁期限ハ受訴裁判所ノ管轄區域内ニ於テ送達ヲ為ス時ハ寧クモ三日其管轄區域外ト雖モ獨乙国内ニ於テ送達ヲ為ス時ハ寧クモ一週大市及ヒ小市事件ニ於テハ寧クモ二十四時以上トス
外国ニ於テ送達ヲ為スヘキ時裁判所ハ期日ヲ確定スルノ際答弁期限ヲ指定ス可シ

第四百六十條 (全上)

訴訟ハ訴狀又ハ訴訟ヲ記載セシ調音ヲ送達シテ之ヲ提起スルモノトス

第四百六十一条（全上）

通常ノ開廷日ニ於テハ原告被告両造ハ喚出ナク又期日ノ指定ナク訴訟ノ審理ノ為メ裁判所ニ出廷スルコトヲ得

此場合ニ於テ訴訟ノ提起ハ原告ノ口頭陳述ヲ以テ之ヲ為スモノトス

〔第一解制定沿革〕 北部獨乙聯邦中條第六百六十四條ニテハ準備會

面ノ送達ヲ禁止ス而レテ廿第百八十七條ニ於テ裁判所書記ニ口述

レ記録ニ記載セシメテ訴訟ヲ提起スルコトヲ許シアリナカラ友ノ執

行吏ヲシテ送達セシムルハ之ヲ採ラサルナリ此他ハ本條ト同趣

ナリ又字漏生國中條第四百九十九條ハ本文第四百五十七條ハ至第

四百五十九條ノ三條ヲ集メアリテ且吾面ヲ以テ提起スル訴訟ニハ

原告ノ外隣亦二通リ作リ之ヲ裁判所書記局ニ呈出ス一キヲ以テ兩定

セ下ノ第三條ニ於テ外ハ各中條殆ント同一ナリ

国務院委員會ニ於テ本條第四百六十三條ニ之アリシ

裁判所執行吏ノ吾面ヲ以テ提起シ得ルノ一項ヲ削除シ又本文第四

百五十九條第二項ニ裁判長トアリシヲ本法第四百五十六條第一條

第二條ノ趣旨ニ依リ裁判所ト改正シタリ而レテ本文第四百五十八

條ニ付キ本條^法第四百七十九條ノ例外規則ヲ定メントノ動議並ニハレ

ノフル國第四百八十四條原告人ノ申立ニ依リ原告被告両造ヲ呼出ス

ル但本法第四百七十一條^法ニ採用セルトノ動議ヲ垂却シタリ

〔第二解理由說明〕 本文第四百五十七條乃至第四百六十條（一）訴訟人

ヲシテ各種ノ方法ニ於テ訴訟手續ヲ為サシメ得ルノ趣旨ヲ定メテ

ルナリ乃就中其著レキハ三種ノ手續ニテ訴訟人提起ノ片之ヲ選擇

シ得ルナリ即第一原告自ら作リ又ハ原告ノ男メ作リタル訴状ヲ

受訴裁判所ニ呈出スル方法第三訴訟ヲ裁判所書記ニ口述シ之ヲ調
査ニ記載セシメテ起訴スル方法第三原告被告豫メ呼出及ヒ期日ノ
指定ヲ為スヲナリシテ通常ノ開廷日ニ同件出廷シ訴訟ヲ口述シテ
為ス方法はナリ

訴訟ヲ提起シ訴訟物件ノ拘束ハ本法第二百三十条第一項第二百三
十五条第一項及第二項第三ノ場合ニ於テハ訴訟ノ口述ヲ以テ始マ
リ第一第二ノ場合ニハ即訴状又ハ訴訟ノ調停ヲ送達シタルヲ以テ
始マレトシホモ支度四百六十五条四百六十一條第二項

口述シテ為ス起訴ノ方法ハ裁判所ト訴訟人トノ關係ヲ密隔セシム
ルヲ以テ完全ナラズトシ説クシテ蓋シ漏生固中梅ニテ裁判官ニ口述
シテ起訴スルヲ禁シ只裁判所書記ニ口述シテ調停ニ記載セシムル
ヲノミテ許セリ此種獨乙疎却ハ律第百八十七條本條ハ即之ニ

模倣シテトシハ必竟許状ヲ作り成スニ付キ裁判官ノレノ失與セン
メスレテ以テ九一ノノ疑意ヲ避ケレマナリ

「第三解訴訟」訴訟ハ唇面ヲ以テ提起スルト口述シテ調停ニ記載セ
シメ起訴スルトニ論ナク其指載スルキ要件ニ付キ本法第二百三十
条第二項第三項第四項ノ規則ニ準拠スルキナリ而シテ其許音ニ付
キ審査スルルハ區裁判所ニ於テモ亦之ヲ許サズ「本法第二百三十条
第一解第二而三十三條及ヒ第二而三十四條ノ第一解本條只裁判所書
記ハ期日ノ指定ヲ為メ許状ノ區裁判所書記ニ呈出スルノニ「本法第
百九十三條第二項本條

「第四解呼出」唇面上ノ訴訟ニ付テハ許状ノ原亦及ヒ隣本二通ノ三
通ヲ裁判所書記ニ提出スルキナリ上ノ第一解本條而シテ其隣本ノ
一ハ裁判所書記均ニ留メ置キ本法第二百二十四條本條他ノ一ハ本法

第五十六條第二項ノ規則ニ照シ之ヲ公証シタルモ「指定期日」
記入シタシ後被告ニ送達スルヤナリ「本法第五十五條第五十六
條第七十三條未定而シテ原告ノ之ニ對シテ呼出證書ヲ添付シテ裁
判所執行吏ヨリ原告人ニ送付ス本法第七十三條第七十四條並
ニ第五十三條乃至第五十六條第五條未定

又調音ニ記載セシメテ為ス許諾ニ付テ「即裁判所書記」自ラ公証
ヲ行レタルニ「調音」應本「本法第五十六條第二項」ニ「附屬宣誓」
第五十二條未定及ヒ喚出狀「本法第五十二條第三項未定」ヲ添付レ
ル之ヲ執行吏ニ交付ス執行吏ハ之ヲ被告ニ送達シ後世喚出證書ノ
原告ニ送付ス本法第五十五條第五十六條第七十三條未定其
調音ハ即裁判所ニ留置ス本法第二十四條未定故ニ之ヲ執行吏ニ
交付スルヲナキナリ

原告ハ本文第四十五條ニ依リ被告ノ呼出ヲ自ラ為スヲモ隨
意ナリトス「本法第五十二條未定」此場合ニハ即本法第二而
三十三條ト第五十一條以下ノ規則ヲ適用スルヤナリ故裁判所
書記ノ媒介ヲ要セザルナリ
獨乙国外ニ於テ為ス送達並ニ獨乙国内ノ治外法權享有者ニ為ス送
達ニ付テハ「本法第八十二條以下」又「公示送達」ニ付テハ「本法第八
十六條以下」ヲ参照スル

「第五條未定期限」此等未定期限ノ趣旨ニ付テハ「本法第九十八條第
一解第一第二項」参照スルニシテ「本法第四十五條」ノ期限ハ「即裁判
所執行吏」本法第二而四條ニ照依シ之ヲ短縮シ得ルナリ「本法第二
而三十四條並其註解」未定

大市小市ニ付テハ「本法第三十條並ニ廿第一解乃至第五解」未定